



「教会学校を何とかしたい」

池田中央教会
鎌野 善三

「福音のために、わたしはどんな事でもする」

(第二「コリント」9・23)

かなり以前から、教会学校の不振が叫ばれています。私たちの教会でも、クリスチャンホームの子どもたちはある程度来ていますが、一般の子どもたちはまれにしか来ません。このままでは将来の教会はどうなるかと心配になり、何とかこの現状を打開したいと心から願います。子どもをとりまく環境が大きく変わっただため、新たな方策を生み出すことが必要なのでしょう。実際にできるかどうかわかりませんが、こうしたらどうかと思うことを、幾つかあげてみたいと思います。

一、誘いやすい教会学校

今は、学校の前でチラシを配ることも難しくなってきました。新しい子どもが教会に来るための最善の方法は、子どもたちが自身が友人を誘ってくることです。今来ている子どもたちの信仰が強められると、それが実現するに違いありません。

今の公立校では、教師一人に生徒が30人程の割合でしょう。でも教会では、教師と生徒が一對一という場合さえあります。まず教師が変わられ、本気で子どもたちを育てるなら、彼らも変えられ、友だちを誘ってくるようになると思います。でも、その友だちが続けて来るようになるためには努力が必要です。

二、楽しい教会学校

子どもたちの興味をひくことは、昔に比べて格段に多くなりました。テレビゲームやスポー

ツクラブ、それに子ども会や家族旅行など、何でもあります。そんな環境の中にいる子どもたちには、賛美にしろ、お話にしろ、楽しいものを考えていかねばなりません。

幸い、子ども向きの動きのある賛美歌も次々と生まれています。子どもたちが目を輝かせて聞くようなお話の仕方もあるでしょう。また聖書物語のビデオやDVDなども発売されています。多少費用がかかっても、そのようなものを取り入れることが大切ではないでしょうか。メビックとかアワナクラブがしているプログラムは、大変参考になります。教会学校に来るのを毎週楽しみにしている子どもたちがいるなら、教師にもやりがい生まれてくるでしょう。

三、役に立つ教会学校

オウム真理教事件以降、世間は宗教に対して懐疑的になり、教会に子どもが行くのを快く思わない親が増えていきます。そういう状況では、例えば、子どもや親に、習字や絵、あるいはパソコンや英会話などを教えるのは、親や地域の人々に理解される契機となるのではないのでしょうか。多くの人数を集めなくてもいいのです。たとい少数でも、「教会に行けば役に立つことを教えてくれる」と思ってくれるなら、事態は好転します。教会に教える賜物をもつ兄弟がもらえるなら、教会学校のためにそれを活用していただきましょう。

教会学校の働きは、教会の将来を左右します。子どもたちが喜んで教会学校に来て、はつきりと主を信じるよう、教会あけて、できる限りのことをしようではありませんか。

牧羊者

目次

巻頭言	1
カリキュラム解説	3
教師養成講座 整えられたCS教師	5
福音の希望 ≪4月教案≫	8
聖霊の待望 ≪5月教案≫	20
信じる者の復活 ≪6月教案≫	35
牧羊ひろば (三春新生教会)	47
おわりに	50

二〇〇九年度 カリキュラム解説

(編集部)

はじめに

二〇〇九年度は、三年サイクル・カリキュラムの三年目になります。一年目(二〇〇七年度の年題は、「信仰に生きる」(ハバクク2・4)、二年目(二〇〇八年度)の年題は、「愛に生きる」(ヨハネ15・9)、そして三年目(二〇〇九年度)の年題は、「希望に生きる」です。

また、テーマ聖句は、「彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもつて喜んでいる」(ローマ5・2)が掲げられています。

おもに、「教会」を通して与えられる希望を見ると共に、旧約聖書の中からは、「預言者たちの希望」を採り上げます。暗黒の中に輝く預言者たちの希望の幻です。今年も、教会暦と教会行事を大切にカリキュラムが組まれています。

期題

- I、4月～6月が「復活の希望」、
 - II、7月～9月が「教会の希望」、
 - III、10月～12月が「預言者たちの希望」、
 - IV、1月～3月が「キリストにある希望」
- 次に、期題および単元ごとに解説をします。

月ごとの解説

I、4月～6月「復活の希望」

単元4月は「福音の希望」

週題は、「十字架」「復活」「エマオにて」「エルサレムにて」です。

十字架と復活の『福音』、ここにこそ真の希望があります。第一週が受難週礼拝、第二週が復活祭礼拝です。復活のメッセージはイースター礼拝だけでは勿体ない！ つづく第三週、第四週と希望の中の希望である復活の記事から恵みをいただきます。

単元5月は、「聖霊の待望」

週題は、「父の約束」「祝福の道(母の日)」「証人への道」「待望の祈り」、そして「五旬節」(ペンテコステ)です。

5月31日のペンテコステ礼拝に向かっての準備です。第二週は母の日が入ります。幼いなりにも、第三位の神、聖霊なる神、慰め主、助け主なるお方を、信仰を持って受け止められるなら、なんと幸いなことでしょう。そのためには、教師自身が身をもって体験させていたきたいものです。

単元6月は、「信じる者の復活」

週題は、「復活の希望」「野の花」「父の戒め」「霊のからだ」です。

この月は半分が教会行事となります。第二週が花の日・子どもの日、第三週が父の日です。他の二回は「信じる者の復活」という、これ以

上ない希望が採り上げられています。

II、7月～9月「教会の希望」

単元7月は「はじめの教会」

週題は、「教会誕生」「美しの門」「救いうる名」「イエスの名によって」です。

この地上にありながらも天国のひな型としての教会！その教会はいつどのように誕生したのか？教会に、また信じる者に与えられている力は何のようなものであるかを深く知りましょう。

単元8月「迫害と教会」

週題は、「聖霊に満たされて」「いのちの言葉」「散らされた人々へ」「万物の終り」「栄光の冠」です。『キリスト教は迫害の上に育つ』とまで言われます。迫害を通して、神からの命の真価が発揮されます。揺るがない信仰と希望が幼い魂にもつちかわれていきますように。

単元9月「宣教する教会」

週題は、「マケドニアの叫び」「ピリピの祈り場」「真夜中の奇跡」「コリント伝道」です。

パウロの第二次伝道旅行により生み出され恵まれたピリピ教会の誕生物語を学び、コリント宣教から聖霊によるダイナミックな宣教を学びます。

III、10月～12月「預言者たちの希望」

単元10月は「偶像の中で」

週題は、「エリシャ」「イザヤ」「ミカ」「エレミヤ」です。預言者が、暗闇の世に向かって、

神による希望を抱き、大胆に語る中から学びます。

単元11月は「捕囚の中で」

週題は、「エゼキエル」「ダニエル」「三青年」「収穫の祝福」「イザヤの幻」です。

捕囚の辱めの中にも、異教の地にあつて輝く信仰に生き抜いた人々を通し、共に希望に生きることを学びます。さらに、この月には収穫感謝があり、そして、希望をもって救主を待ち望むアドベントへと入っていきます。

単元12月は「クリスマス」

週題は、「救主誕生」「クリスマスの賛美」「まことの王」「感謝！」です。

クリスマスはまさに『希望の星』です。信仰によって、真のクリスマスを一人一人の幼子が迎えることができますように！

IV、1月～3月「キリストにある希望」

単元1月は「新生の希望」

週題は、「新しく生れる」「神の恵み」「罪の赦し」「神の子」「相続人」です。

年明けと共に、キリストにあつて真に新しく生れる喜びと希望に満たされましょう。

単元2月は「聖化の希望」

週題は、「栄光にあずかる希望」「キリストが内に」「内住のキリスト」「待望の祈り」です。

子どもたちには難しい面がありますが、新生と共に聖化の必要があること、その恵みがわかりやすく伝えられたらと思います。

単元3月は「再臨の希望」

週題は、「父の家の希望」「再臨に備える」「再臨の宣言」「救いの完成」です。

聖書が私たちに与えていく最大の最終の希望が、再臨であることを心に刻みます。天に確かな希望があること、そこから救い主が必ず再び来られることを知り、そのために備える信仰者とされましょう。第四週はパームサンデーです。完全な救いを成し遂げてくださったイエス様こそ、どんな時にも私たちの希望です。

夏期学校教案

今年度の夏期学校教案は、「炎の宣教者パウロ」であり、中心聖句は「御言を宣べ伝えなさい」(Ⅱ

テモテ4・2)です。

キャンパーの皆さんが回心に導かれ、救いの喜びに満たされ、み言葉を宣べ伝える者に導かれるようにと願います。

おわりに

まさに今の世は希望のない状況で、暗黒度が増しています。その中で、「希望に生きる」私たち一人一人が、やみに輝くともし火となつて、キリストの輝く証人とされ、主に用いられる者とされたものです。そのために、毎週毎週の礼拝が生かされ、祝福されたものとなりますように、とお祈りいたします。

子どものための聖書日課 きょうのマナ

小野淳子 著

聖書日課の名著「神と共に歩む日々」の著者が、
子どものための聖書日課を書き下ろしました。
子どもたちへのプレゼントに是非お買い求めください。



A5サイズ 224頁 定価2,100円(税込)
ISBN 978-4-903370-10-1
最寄りのキリスト教書店、一般書店でお求めください。

教師養成講座

整えられたCS教師

小野 淳子

はじめに

「キンボール先生は、ドワイトの仕事場にはいつて行きました。そして、胸の中からこみあげてくる感情をおさえながら、この少年に神様の愛について短く語りました。ドワイトが自分の罪をくいあらため、イエス様を救い主として信ずるまでに、長い時間が必要ではありませんでした。少年と教師がそこにひざまずいて熱い祈りをささげた時、神様に用いられた大伝道者ムーディの信仰生涯がスタートを切ったのです。先生を送って店の外に出たドワイトには、まわりのものがすべて、愛に輝いているように感じられました。太陽の光はさんと地上にふりそそぎ、小鳥はほがかにさえずっていました。そして、この十八歳の少年にとって、世界はまったく新しいものとなったのです。一八五六年の春の日の朝のことでした。」
(インマヌエル少年文庫『明るいひざし 回心物語、ドワイト・ライマン・ムーディ』より)

ここには、アメリカ合衆国の東海岸の古い町ボストンにあるマウント・ベルノン教会の日曜学校教師エドワード・キンボール先生が、D・L・ムーディの回心のために用いられたことが記されています。こうした事実を知る時、神様がいかに大

きな期待をもつて教会学校教師(CS教師)を立てていくのださるのかが心にせまってきます。社会のひずみの中で迫害を受けている幼い魂の救霊と養育のために、またその中から献身者を生み出していく働きのために、主にささげるCS教師とならせて頂きましょう。

- I、CS教師の召命
- II、CS教師の原動力
- III、CS教師の使命
- IV、CS教師の光栄
- V、CS教師の実際

I、CS教師の召命

「あなたがたがわたしを選んだのではない。わたしがあなたがたを選んだのである。そして、あなたがたを立てた。それは、あなたがたが行って実をむすび、その実がいつまでも残るためであり、また、あなたがたがわたしの名によって父に求めるものはなんでも、父が与えて下さるためである」

(ヨハネ15・16)。

クリスチャンとして生かされているのも奇しい「神様の選び」ですが、CS教師として今あるのも、やはり奇しくも「神様の選び・神の召命」です。自分でなりたくてなった人、牧師やCS校長に言われてなった人、知らず知らずのうちに引き込まれてしまった人(?) などなど、きっかけは違っていても、神様が召してくださることにまがいはいありません。この事実にいち早く目が開かれて、神様と直結したCS教師とされることが大切です。

その時、信仰においても、奉仕においてもさまざまなことがある中で、いつもこの原点に立ち帰り、なお整えられて進むことができると確信します。

自分という者の正体も、賜物も、何もかも一切知り尽くした上で、この尊い務めに召していただくのが神様だという認識のもとに、どんな時でもこのお方の前に座りなおしていく時、そのつど、そのつど、上からの新しい力と光と導きと、アイデアと、愛と信仰と希望が与えられていくに相違ありません。

II、CS教師の原動力

彼らが食事をすませると、イエスはシモン・ペテロに言われた、「ヨハネの子シモンよ、あなたはこの人たちが愛する以上に、わたしを愛するか」。

ペテロは言った、「主よ、そうです。わたしがあなたを愛することは、あなたがご存じです」。イエスは彼に「わたしの小羊を養いなさい」と言われた（ヨハネ21・15）。

「主は、わたしたちのためにいのちを捨てて下さった。それによって、わたしたちは愛ということを知った。それゆえに、わたしたちもまた、兄弟のためにいのちを捨てるべきである」（ヨハネ3・16）。

C S教師の「資格」とその「原動力」についてですが、まず、明確な新生の体験をもつ人である必要があります。C S教師とは単に子どもを相手に時間を過ごすだけの者ではありませんから。後に見ますように「命を与えていく」奉仕者なので、教師自身が、イエス・キリストの十字架によって、罪のゆるしを経験し、新しく生まれ変わった者として生かされていることは、大切な資質です。そして、さらには、きよめられた教師であることも要求されます。そうでないと、柔らかな魂の幼子に、多くの肉からくるつまずきや痛みを与えることになるからです。

ゆえにその「原動力」は、「贖罪愛^{あひなぐみ}」です。イエス・キリストに、これほどにも愛されている！という感激。そこから、主が求められる幼子への愛と奉仕に燃やされていくべきです。主を愛するゆえに、主が愛される幼子への愛と奉仕を惜しみなく注ぎ出していく者とされます。私たちの奉仕が重荷となってきたり、無味乾燥になってきたり

した時、私たちは主の十字架のふもとにひざまずく必要があります。そこに再び、主への愛と幼子への愛と、またこの尊い務めへの情熱がリバイブされてくるにちがいありません。

Ⅲ、C S教師の使命

「シオンの娘よ、声高らかに主に呼ばわれ、夜も昼も川のように涙を流せ。

みずから安んじることをせず、あなたのひとみを休ませるな。

夜、初更に起きて叫べ。

主の前にあなたの心を水のように注ぎ出せ。

町のかどで、飢えて

息も絶えようとする幼な子の命のために

主にむかつて両手をあげよ」（哀歌2・18、19）。

1、幼子を受け入れる

「幼な子らをわたしのところに来るままにしておきなさい」（マルコ10・14）と、主イエスは喜んで、すべての幼子を受け入れられました。大人でもそうですが、その日そのときの出会いが初めてあり、終りであるかのように、その一人、その一人をありのまま受け入れられる教師でありたいものです。その霊的印象は、きつと深く幼子の心に残るでしょう。

2、幼子の模範となる

幼子はC S教師を通してキリストを見ます。キリストに救われている者の喜びの姿。キリストを信じ、従うということは、こんなにも素晴らしい、価値高い道なのですと、触れ合いの中で無言のうちにも示していける教師でありたいものです。クリスチャンの先輩として模範となる使命は大切です。

3、幼子の救霊者に

究極の使命は幼子の「全人の救霊」にあります。キリストは救うために、この地上に来てくださった。幼子とてキリストなしには、滅び行く人です。また、すべての幼子が皆大人になるとは限りません。しかし「救霊」は神の業です。そのために、私たちは、委ねられた一人一人の魂のために、祷告、すなわちとりなし祈ってゆく必要があります。涙の祷告によって一人でも多くの幼子を永遠の御国へと移すものとされたいものです。以下の引用文は筆者が神学校入学のために備えていた時、魂がゆすぶられた一文で、深く心に刻まれたものです。

『救霊者になることは、この世における最も幸福なことである。あなたは一つの魂を主に導くたびに、この地上に新しい天国を得るのです。しかし、天上で私たちを待ち受ける祝福を、だれが想像できよう！「主人といっしょによるこんでくれ」という言葉のすばらしさよ！救われた罪人のために、キリストがいかに喜ばれるかを、あなたは知っているか。この喜びこそ、私たちが天におい

て得る喜びである。主が王座に昇られる時、あなたも彼と共にある。「よくやった、よくやった」という声が天をゆるがす時、あなたは報いにあずかる。あなたは彼と共に労し苦しんできた。今や、あなたは、彼と共に支配する。あなたは彼と共にまいてきた。そして彼と共に刈り取るのである。あなたの顔は彼の顔のように汗におおわれ、あなたの魂は、彼の魂のように人々の罪を悲しんだ。今あなたの顔は彼のごとく天上の輝きに照りさえ、あなたの魂は彼のごとく、祝福の喜びに満たされる。』(C・H スボルジョン『夕ごとに』12月20日分)。

IV、CS教師の光栄

「涙をもつて種まく者は、
喜びの声をもつて刈り取る。

種を携え、涙を流して出ていく者は、

束を携え、喜びの声をあげて帰ってくるであろう」

(詩篇126・5、6)。

涙の種まきの中には、多くの祈り、多くの訪問、多くのメッセージ準備の時、疲れや病との戦いの日もあるでしょう。さらに、さまざまな生活の中での精神的疲労、あるいは時には霊的戦いもあるでしょう。しかし、そうした種まきあつての刈り取りの喜びが必ずあります。一つにはCS教師をしていたがゆえに、み言葉を十分に学べるという収穫があります。そして、地上において、幼子の救いという果実を与えられる歓喜！それに加えて、

一人の幼子のために流した涙と労苦に対して、神様は天上においてどんなにか重い永遠の栄光を報いてくださることでしょうか。天国において、この地上では想像もつかなかったような光景に出くわして、私たちはどんなにか驚くことでしょう！「主人といっしょに喜んでくれ！」とのみ声を聞く喜びを思う時、それはまた、私たちの奉仕へのもう一つの大きな原動力とも言えるでしょう。

V、CS教師の実際

「もし人が卑しいものを取り去って自分をきよめるなら、彼は尊いきよめられた器となつて、主人に役立つものとなり、すべての良いわざに間に合うようになる」(Ⅱテモテ2・21)。

1、小事に忠実に

CS教師は、地道な忍耐と細やかな愛情を注ぎ続けてゆく、隠れたところで黙々となされていく奉仕です。そこには「忠実」が要求されます。しかも、小事に忠実であることです。日毎積み重ねられていく祈りと、学びと教材準備、説教準備、そして、聖日当日の受け入れ態勢、礼拝姿勢、分級態度、フォローアップの訪問、記録等々。こうしたことの積み重ねが、やがて結実へとつながっていきます。

2、み言葉への感動

CS教師は、「明るい」人格と、生き生きとした喜びにあふれた態度で、生徒一人一人に接したいものです。そのためには、まず、自分自身がその日のみ言葉に霊的な感動を覚えて奉仕にむかう必要があります。み言葉を生きたものとして、幼子の心に刻むためです。幼子と共に「み言葉暗唱」に励むのはいかがでしょうか。子どもたちの暗唱力は大したものです。幼い柔い魂の内にみ言葉が満ち満ちていくのは、何と素晴らしい宝を貯えるような作業でしょう。それはまた教師にとつても同じです。み言葉を暗唱し、にれはみ、感動をもつて、み言葉の恵みを分かち合えますように。

3、神様の同労者

私たちは、この尊い奉仕を、私たちだけでしているわけではありません。ご任命くださった神様は、同時にその力も与え、また、共に臨在してください。また、不思議をなさってください。私たちが幼子の前に立つ時、そこには目に見えないお方も共に立つておられるのです。そして、神様は「きよい器」を用いられます。罪、汚れ、肉を拒む鋭敏な魂を与えていただいて、自分自身を聖別する教師でありましょう。

そこに、聖なる霊の、人を生かす働きが起こされるにちがいありません。臨在に励まされ、神様の不思議とみ業に期待して、これからますます整えられつづけ、用いられつづけていきたいものです。

聖書 ルカ23・44～49

テーマ 十字架 パームサンデー

序論

(金井)

新しい年度になった。今週は受難週であり、この週の金曜日に主イエスは苦難を受けて、十字架上で死なれた。冬が終わって春となり、死んだように枯れていた大地に今、新しい命が躍動している。そのごとく主イエスの死によって生み出された新しい霊的な命について、今日は学びたい。

一、暗闇の支配

主イエスが十字架につけられたのは朝の9時頃であった(マルコ15・25)。(昼の十二時ごろ)に「太陽は光を失い、全地は暗くなつて、三時に及んだ」。過越祭は満月の時期に行われるので、これは日食ではない。この暗闇は砂嵐によるものだという説もあるが、確かなことはわからない。その原因が何であれ、この福音書の著者ルカがこれを記したことは象徴的・神学的な意味がある。

イエスが降誕される少し前に、祭司ザカリヤはこう預言した、「そのあわれみによつて、日の光が上からわたしたちに臨み、暗黒と死の陰とに住む者を照し、わたしたちの足を平和の道へ導くであろう」(1・78～79)。この暗闇は神から離れた人間世界の霊的状态を象徴している。

イエスが降誕された後、老聖徒シメオンは幼子イエスを抱いてこう預言した、「この救はあなたが万民のまえにお備えになったもので、異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」(2・

31～32)。イエスはこの暗き世界を照らす光として来られた救い主である。

しかし、神の御子イエスの十字架の死によつて人類の罪の贖いが成し遂げられ、悪しき勢力が無力化されようとするこの時、悪魔は必死に抵抗をしている。オリブ山でユダヤの指導者たちに捕えられた時に、イエスはこう言われた、「今はあなたがたの時、また、やみの支配の時である」(22・53)。

二、裂かれた聖所の幕

主イエスは午前9時頃から午後3時頃まで約6時間、十字架上で苦しみを受けられた後、(息を引きとられた)。その死の直前に(聖所の幕がまん中から裂けた)。エルサレムの神殿には聖所と至聖所があり、その境目には隔ての幕と呼ばれる垂れ幕があった。至聖所は神が臨在される場所であり、大祭司だけが年に一度、贖罪のためにそこに入ることが許されていたのである(レビ16章)。ところが、その隔ての幕がこの時、破られた!

この出来事は、イエス・キリストの贖罪の死によつて、神殿における贖罪の犠牲が不要になったこと、そして、誰でも神に近づくことができるようになったことを意味する。

「キリストがすでに現れた祝福の大祭司としてこられたとき、手で造られず、この世界に属さない、さらに大きく、完全な幕屋をとおり、かつ、やぎと子牛との血によらず、ご自身の血によつて、一度だけ聖所にはいられ、それによつて永遠のあがないを全うされたのである」(ヘブル9・11～12)。「こういうわけで、わたしたちはイエスの血によ

つて、はばかりことなく聖所にはいることができ、彼の肉体なる幕をとおり、わたしたちのために開いて下さった新しい生きた道をとつて、はいって行くことができる」(同10・19～20)。

三、変えられた人々

「イエスは声高く叫んで言われた、「父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます」。こう言つてついに息を引きとられた」。この言葉は詩篇31篇5節とほぼ同じである。これは敬虔なユダヤ人が午後3時の祈りの時によく朗誦した詩篇であり、眠る前の祈りの言葉であった。主イエスは父なる神に完全に信頼して、平安のうちに死なれたのである。

「百卒長はこの有様を見て、神をあがめ、「ほんとうに、この人は正しい人であった」と言つた。この光景を見に集まつてきた群衆も、これらの出来事を見て、みな胸を打ちながら帰つて行つた。すべてイエスを知つていた者や、ガリラヤから従つてきた女たちも、遠い所に立つて、これらのことを見ていた」。イエスの死は、異邦人であるローマの百卒長に信仰を与え、イエスを死に追いやったユダヤの民衆に悔い改めを与え、イエスの従者たちに証人としての使命を与えたのである。

結論

主イエスは今、天上で大祭司として私たちのために父なる神にとりなして祈つておられる。主が流された血によつて私たちは罪を赦され、きよめられて神に近づかせていただける。私たちも主イエスを見つめ、救いときよめの恵みを証しよう。

研究資料

(中島)

テキスト

44 昼の十二時ごろ 原語では第六の時。日の出から日没までを12で割ったちょうど真ん中で、正午に当たる。**太陽は光を失い、全地は暗くなつて**全地とは全世界のことではなく、あくまでもその地方のこと。暗やみは出エジプトの災厄の一つであり(出エジプト10・22)、預言書では終わりのさばきの時に起こる現象として挙げられている(イザヤ13・10など)。この暗やみは、キリストが人々から拒絶されたことに対する神の痛みを象徴している^{と見る}ことができる。マルコやマタイが、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになったのですか」を記録することによって、この暗やみに神とキリストとの隔たりを暗示させるのに対し、ルカではそのモチーフは弱められている。ここでルカは全地が暗くなった理由を、「太陽は光を失い」と説明している。この表現を日食と捉える^と注釈者もいるが、満月である過ぎ越しの季節に、実際の日食は考えられない(日食が起こるのは新月のときのみ)。おそらく「カムシン」と呼ばれる中東の局地風(ヨロツパではシロツコと呼ばれる)が吹きすさんで、砂ぼこりを巻き上げ、日光を遮ったのであろう。

45 聖所の幕 神殿には13の幕があつたが、そのうちの聖所と至聖所とを隔てる幕を指すのであろう。至聖所は神の臨在の場所、大祭司だけが年に一度、入ることを許された。この幕が新約で登場するのは共観福音書の他にはヘブル書のみ(6・19、9・3、10・20)で、そこでは救い主の贖いの死と復活について述べている。**まん中から裂けた** 動詞は受動態が用いられており、背後に神の御手があることを暗示している。この幕が裂けたことの意味としては、主に以下の三つが挙げられるが、いずれも妥当な解釈であろう。①来るべき神殿の崩壊を予兆する。②キリストの死によって、神に近づく道がすべての者に開かれたことを意味する。③神を礼拝するのに、もはや神殿における儀式が必要なくなったことを表す。

46 父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます 七十人訳(旧約聖書のギリシア語訳)の詩篇31・5「わたしは、わが魂をみ手にゆだねます」とほぼ同じ表現(ただし動詞が未来形から現在形に替わり、父への呼びかけが加えられている)。敬虔なユダヤ人は午後3時頃、夕刻の祈りをささげたが、その際よく朗誦されたのがこの詩篇であつたと言われる。キリストは、まるで眠りにつく前のような平安な祈りを、最後の息を引き取る直前、まさに人生の夕刻に、神にささげたのである。その安らかさは、その前の二つのしるしと極めて対照的であつた。なお類似した表現として、ステパノは殉教の際「主イエスよ、わたしの霊をお受け下さい」(使徒行伝7・59)と叫び、1ペテロには「神の御旨に従つて苦しみを受ける人々は、善をおこない、そして、真実であられる創造者に、自分のたましいをゆだねるがよい」(4・19)とある。

47 百卒長はこの有様を見て、神をあがめ これは使徒行伝における異邦人の回心の予表であると言え。神の力と恵みが表されたときに、人々が神をあがめるのはルカ福音書の特徴である(2・20、5・26他多数)。ここでも続く百卒長によるキリストの評価は、神への賛美となつている。**ほんとうに、この人は正しい人であつた** マルコ、マタイでは「まことに、この人は神の子であつた」とあるのに対し、ルカは「正しい(あるいは、罪なき)」「(ディカイオス)と表現している。これは、人間の法的な無罪性、宗教的な正しさを指す語である。これは異邦人である百卒長の言葉ではあるが、結果的にキリストの死を通して神をあがめていることから、単なる法的な無罪にとどまらない意味が、ここには込められていると言える。すなわちマルコ、マタイに通じるキリストの神性告白である。なおルカ文書においては、ローマからの無罪宣告は、重要な意味を持つている。すなわち使徒行伝の中で、ローマの当局はパウロや教会をいずれの時も有罪としていないのである。

48 群衆も胸を打ちながら帰って行った 胸を打つという動作から悔改めを汲み取るのは行き過ぎで、悲嘆、哀悼を意味する程度であろう。この嘆きについてはゼカリヤ12・10も参照。

49 ガリラヤから従ってきた女たち この女性たちがキリストの復活後の場面で重要な働きをすることになる。

参考文献 注解書 E. Earle Ellis (New Century Bible), I. Howard Marshall (NIGTO), John Nolland(WBC)等。その他 The IVP Bible Background Commentary: New Testament, Theological Dictionary of the New Testament 等。

聖書 ルカ23・44〜49
 タイトル 十字架
 暗唱聖句 父よ、わたしの霊をみ手にゆだねます。
 ルカ23・46
 目標 イエス様を信じて救われよう。

導入 (飯田)

先月、イエス様が子どものロバに乗ってエルサレムに入られたお話しを聞きましたね。それは、イエス様がよいよ十字架にかけられて死なれる5日前の事でした。今週の金曜日が、イエス様が十字架にかけられた受難日になります。ですから、イエス様がエルサレムに入城されたパームサンデーは、今日になります。今週はイエス様の十字架を深く心に留めながら過ごしましょう。

十字架にかけられたイエス様

イエス様は、何のためにこの世に生まれて来られたのでしょうか。また、何のためにイエス様はエルサレムへ入城されたのでしょうか。それは、十字架にかけられるためでした。イエス様は、死ぬために生まれ、死ぬためにエルサレムへ入城されたのです。皆さんの中で「私は、死ぬために生まれて、死ぬために今、学校へ行っています！」という人はいないでしょう。でも、イエス様はひたすら死に向かつて約33年間歩まれたのです。イエス様はエルサレムに入城してから、弟子たちに大切な事を話されたり、律法学者たちと議論をされたりしました。イエス様がエルサレムへ入城された時は、多くの人たちが、「ダビデの子にホサナ」と言って飲

迎したのに、自分たちが期待しているような救い主ではない事が分かってくると、皆イエス様から離れて行ってしまったのです。そして、イエス様はどうとう捕まり、十字架につけられてしまったのです。

身代りの十字架

十字架はアクセサリーではありません。これは死刑の道具です。十字架刑は、大変大きな罪を犯した人が受ける刑で、呪われた者が受けるものでした。両手、両足に釘を打たれ、十字架の上に磔にされるのです。そして、死ぬまでずっと木にかけられているのです。イエス様は、何か大きな罪を犯したので十字架に付けられたのでしょうか。そうではありません。イエス様の生涯で罪を犯した事は一度もありませんでした。しかし、イエス様は、私たちの罪を救うために、ご自身が私たちの身代りとして十字架にかけられたのです。

第二次世界大戦中、ポーランドにコルベという神父がいました。彼はナチスに協力的ではないということでアウシュビッツ強制収容所に入られました。ある日、そこから脱走した者がいました。収容所の規則では、一人が脱走すると残りの者10人が餓死刑にされる事になっていました。10人が選ばれましたが、その中にはコルベ神父の名前はありませんでした。選ばれた者たちが、餓死室に連れて行かれる時、一人の者が「私には妻も子どももいる。死にたくない！」と叫びだしました。すると、「私がその人の身代りになりましょう」と声を出した人がいました。それが、コルベ神父でした。コルベ神父は、一人の男性の身代りとなって餓死室に入り、刑を受けて死んだのです。コルベ神父には何の罪もありませんでした。

た。コルベ神父は愛のゆえに命を投げ出したのです。私たちは、神様に対して多くの罪を犯して来ました。ですから、本当は私たちがその罪を負って死ななければならぬのです。しかし、イエス様は私たちを愛されます。永遠の滅びから救うため、イエス様自身が私たちの犯して来た多くの罪を背負い、身代りとして十字架にかけられ死なれたのです。私たちに幸せと祝福を与えるために。

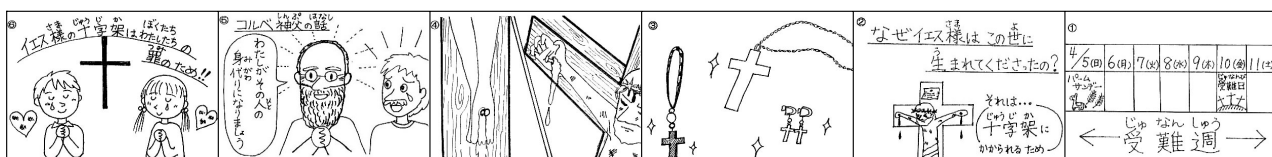
十字架のイエス様を信じて救われよう

イエス様の私たちに對する熱い思いは、十字架の死によって現されたのです。皆さんは、このイエス様の愛をどのように思われますか？ イエス様は私たちに愛のプレゼントを与えてくださいました。また、イエス様は、私たちに素晴らしい人生の道を備えてくださいました。しかし、それを頭で知るだけでは不十分です。それでは救いにあずかることは出来ません。イエス様の思いは、私たちを救いたい！それだけです。今、皆さんは自分には罪があり、救われなければならない者である事を自覚していますか。自分は今のままで良いと思っていますか。救われるための大切な秘訣は、イエス様は私の罪のために十字架にかけられて死んでくださったという事を心から信じることです。

まとめ

イエス様を信じて救われない人は、誰一人としていません。皆、救われるのです。そして、イエス様の素晴らしい愛に満たされて生活する事が出来るのです。さあ、イエス様を信じて救われよう！
 ♪さあイエス様を信じましょう♪

(子どもさんびか60)



聖書 ルカ24・1～12 テーマ 復活 イースター

序論

(金井)

イースター(復活日)はキリスト者にとって最も喜ばしい祝日である。復活して今も生きておられる主イエスのみ言葉を、今日もお聴きしよう。

一、転がされた石

主イエスが十字架上で死なれたのは、金曜日の午後3時頃であった。その日の日没から安息日が始まるため、イエスの遺体は急いで墓に葬られた。主イエスの遺体が葬られた(墓)は石灰岩を横からくり抜いたものであり、中は小さな部屋になっていて、遺体を安置する石の寝台がある。主イエスに従ってきた女性たちは、イエスの遺体が墓に納められる様子を見とどけた。それから、彼女たちは、遺体に塗る香料と香油を用意した。これらは輸入品で、高価なものである。

安息日(土曜日)が終わった後、(週の初めの日)、日曜日の朝まだ暗い時に、彼女たちは墓に向かった。しかし、墓の入口は直径1メートル以上の大きな石によってふさがれている。墓の前では番兵たちが見張りをしている。どうやって中に入るのか? 彼女たちは不安であった。行つたところで追い返されるだけで、主イエスの遺体に香料を塗ることはできないかもしれない。男性の弟子たちは、彼女たちの行動を愚かに思い、馬鹿にしただろう。それでも彼女たちは墓に行かずにはいられなかった。それは、彼女たちがひたすらに主イエ

スを愛し、慕っていたからである。愛はときに、理屈を超えた大胆な行動に人を掻き立てる。

ところが、彼女たちが行つて見ると、「石が墓からころがしてある」ではないか! 主のみ使いが石を転がしたのである。番兵たちは逃げ去っていた。私たちの信仰の歩みにも、大きな石が行く手を阻むことがある。しかし、主はその石を転がしてくださる。私たちも、この女性たちのように愚直に主を求めて、進んでいきたい。

二、空虚な墓

彼女たちが墓の(中)にはいつてみると、主イエスのからだが見当らなかった。彼女たちが(途方にくれていると、輝いた衣を着たふたりの者が、彼らに現れた)。これは天使だろう。彼女たちが驚き恐れて、顔を地に伏せていると、このふたりが言った、「あなたがたは、なぜ生きた方を死人のうげん中にたずねているのか。そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい。すなわち、人の子は必ず罪人らの手に渡され、十字架につけられ、そして三日目によみがえり、と仰せられたではないか」。

彼女たちは香油と香料をイエスの遺体に塗ろうとしていた。それはイエスの遺体を腐らないようにミイラ化して保存し、せめてもの慰めとするためであった。イエスは復活するとあらかじめ教えておられたのに、彼女たちはその言葉を信じられず、忘れていたのである(9・22、18・33)。彼女たちが尋ねたのは(死人)であったが、イエスは

(よみがえられた)。イエスは(生きた方)である。世には教祖の墓や遺骨を大切に祀る宗教もある。しかし、キリスト教にはそのような行いは無い。イエスは復活して今も生きておられるからである。

三、復活の証人

天使に諭されて、彼女たちはイエスが語られた復活の予告を(思い出し、墓から帰って、これらいつさいのことを、十一弟子や、その他みんなの人に報告した)。彼女たちはその途上で復活されたイエスにお会いした(マタイ28・9、ヨハネ20・14～17)。ところが、使徒たちには、それが愚かな話のように思われて、それを信じなかった。

当時のユダヤ社会では女性は軽んじられていた。しかし福音書は、イエスの復活の証人として最初に選ばれたのは女性たちだったこと、そして男性たちは不信仰で懐疑的だったことを記している。イエスの復活は、人間の常識では信じがたいことであるが、これは事実である。そして、死に勝利されたイエスの復活は、驚くべき神のみ業であり、彼こそ真の救い主であることの証明である。

結論

私たちはイエスの復活を現実的に信じているだろうか。私たちもイエスの弟子たちのように、不信仰で懐疑的になり、常識で物事を計って途方に暮れ、無用な心配をしがちではないか。イエスが日曜日に復活されたので、キリスト者はこの日を主の日として礼拝をしている。私たちも生ける主イエスの臨在に触れて、主を証しする者となろう。

研究資料

(中島)

テキスト

- 1 週の初めの日 直訳は「安息日から(数えて)一日目」。夜明け前に 土曜日の日没をもって安息日は終わる。そこから夜明け(この季節は6時ごろ頃)を待つて女性たちは墓に急いだ。旧約において早朝は、暗い間に神がなされたみわざが明らかにされる時間である(出エジプト14・24、列王下19・35等)。用意していた香料 23・56参照。
- 2 石が墓からころがしてあるので 墓の前には大きな円盤形の石が置かれ、おそらく溝に沿って転がるようになっていた。それが動かされていたのを見た女性たちは、墓荒らしによる犯行(いたずらか窃盗)を疑ったかもしれない。
- 3 主イエスのからだが見当らなかった このようにルカは墓が空であったことを強調する。
- 4 輝いた衣を着たふたりの者 重大な出来事の証人として、ここに二人が用意されているのかも知れない(申命19・15参照)。ルカ文書ではイエスの生涯の重要な節目で二人の天使的な人物が証言をしている。それはこの個所の他に、変貌山(へんぼうさん)の個所(9・30)、そして昇天の個所(使徒1・10)である。するとこの御使いたちは変貌山で登場したモーセとエリヤである可能性もある。
- 5 女たちは驚き恐れて、顔を地に伏せていると二人の御使いがまばゆかったのと、おそらく服従を示す行動。なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか ここには叱責(しっせき)の調子が含まれている。女性たちは、イエスがよみがえったことを知って

いるべきなのに(その理由は後で述べられる)、イエスの遺体を探していたからである。

- 6 そのかたは、ここにはおられない もしイエスの遺体がそこにあるならば、それは復活の事実とは相容れないものである。しかし遺体がそこになくというだけでは、逆の立場の論拠ともなり得る(マタイ28・13参照)。よみがえられたのだ これこそがイースターのメッセージであり、また空の墓の説明でもある。まだガリラヤにおられたとき、あなたがたにお話しになったことを思い出しなさい 復活が預言の成就であることがここで強調されている。この場合は旧約の預言ではなく、イエス自身による預言である。女性たちはイエスが自身の復活について預言をした時に、弟子たちと共にいたか、あるいは弟子たちからそのことを聞いていた。それゆえに、彼女たちはイエスを死人の中にたずねるべきではなかったのである。
- 7 人の子は必ず罪人らの手に渡され…と仰せられたではないか イエス自身がなされた予告(9・22、44、18・31、33)と合致する。復活の事実、受難の必然性と切り離すことができないのである。
- 8 女たちはその言葉を思い出し 御使いたちに促されて、女性たちはイエスの預言を思い出した。女性たちが、墓が空である理由に思い至ったことが、ここから当然推測できる。
- 9 これらいつさいのことを報告した なぜ墓が空であったのか、その理由を喜ばしい知らせとして、女性たちは弟子たちに伝えたのである。
- 10 この女たちというのは… ルカはここで初めて女性たちの名前を記す。他の福音書同様、マグ

ダラのマリヤ が筆頭に挙げられているが、ヨハンナを記すのはルカだけである。それは単にルカがヨハンナと知己の間柄であったからであろう。ほかの女たちも ここは構文が複雑で解釈が分かれるが、名前の挙がつている女性たちと、他の女性たちとを切り離さないほうがより適切だと思われる。すなわち、名前が挙がつている女性たちと他の女性たちとを合わせて、「(使徒たちに)話した」の主語と見るのである(新共同訳ではこの解釈を採っている)。

11 それが愚かな話のように思われて… 女性の証言を軽んじるのは、当時の社会の女性観に基づくものであった(それが聖書の女性観ではないことに注意。実際、復活の最初の証人に選ばれたのは女性たちであったのである)。

12 この節に「」が付いているのは、いくつかの重要な写本でこの節が欠けているからである。しかしこの節が後代の加筆ではなく、原典に本来含まれていたと判断する注解者も多い。その方が後の24節とも符合する。ペテロは立って墓へ走って行き… ペテロは墓が空であることは見たが、御使いたちとは会わなかった。ただし別のこと、亜麻布だけがそこにあったのを発見した。それはイエスの体が盗まれたのでないことを雄弁に物語るのであるが、ペテロはそのことには気付かず、不思議に思いながら帰って行った。彼にとつて、復活の喜び、イースターの信仰に至るまでには、まだかなりの距離があったのである。

参考文献 4月5日分と同じ。

聖書	ルカ24・1〜12
タイトル	復活
暗唱聖句	そのかたは、ここにはおられない。よみがえられたのだ。
目 標	主のよみがえりを感謝し、伝えよう。
	ルカ24・6

導入 (飯田)

イースターおめでとうございます。先週は、イエス様が私たちの罪のために十字架に架けられ、死んでくださったお話をお話を聞きました。皆さんは、イエス様の十字架は自分のためだったと信じる事が出来ましたか。今日は、十字架で死なれたイエス様が、何と！ よみがえられた日です。これは、本当の話で、私たちにとって、とても大切な出来事なのです。

イエス様のよみがえりを聞いた婦人たち

イスラエルでは、人が死ぬと香油を体に塗り、そして布を巻いて墓に納めていました。しかし、イエス様は安息日に入る直前に死なれました。ですから、その遺体を安息日が始まる前に急いで墓に納める必要があったので、イエス様の遺体に香油を塗ることが出来ませんでした。そのため、イエス様を愛していた何人かの婦人たちが、イエス様に香油を塗ろうと、朝早く墓に行きました。すると、墓の入口をふさいであつた石が、わきに転がしてありました。婦人たちは、不思議に思ったかも知れません。しかし、そのまま中に入って見ると、そこには納めてあるはずのイエス様の遺体が見当た

らなかったのです。婦人たちは、途方にくれてしまいました。すると突然、輝いた衣を着た二人の人が現われて、婦人たちに話をしました。婦人たちは、イエス様がよみがえられたというのを聞いたのです。皆さんが読んだりしたりする本やゲームの中では、死んだ人が生き返ることがあるでしょう。しかし、その事とはまったく違います。イエス様は、本当に死んで実際に死からよみがえられたのです。

イエス様のよみがえりを信じた婦人たち

輝いた衣を着た人たちは、「イエス様がよみがえる事は、前からイエス様が言われていたことだ」と言うことを婦人たちに話しました。その時、婦人たちはイエス様が言われていた様々な言葉を一生懸命に思い巡らしたでしょう。そして、確かにイエス様が十字架につけられ、3日目に復活すると言われた言葉を思い出したのです。婦人たちは、墓に入りイエス様の遺体が見当たらず途方にくれていました。しかし、イエス様の言葉を思い出して、イエス様の言われたように、確かに死からよみがえられたということを信じる事が出来たのです。途方にくれていた婦人たちの心は、喜びで満たされたに違いありません。イエス様のよみがえりを信じる者は、心が喜びで満たされるのです。今、皆さんの心の中は喜びで満たされていますか。それとも、「絶対に死人のよみがえりなんかありえない」と疑っていますか？ 是非、このよみがえりのイエス様を信じて心に喜びをもらってください。

イエス様のよみがえりを伝えた婦人たち

皆さんは、嬉しいことがあつたらどうしますか。例えば、当たり付きのお菓子を買って、当たりが

当たったら、または自分が前から欲しかったゲームを買ってもらったら、その嬉しい気持ちを、自分だけで留めておくことができないで、自然と周りの人に、「ねえー、ねえー、聞いて」と伝えるのではないのでしょうか。

この婦人たちも、イエス様がよみがえって今も生きておられることを信じて喜びに満たされ、その喜びを、早速弟子たちやその他の人々に伝えたのです。イエス様のよみがえりを伝える婦人たちの足は、墓に向かった時の重い足取りではなく、飛ぶように軽かつたでしょう。

まとめ

皆さんは、死ぬことが怖くないですか。多くの人が死を恐れています。しかし、イエス様はその恐ろしい死からよみがえられました。言い換えれば、イエス様はよみがえることによって、死に勝利してくださったのです。そして、このイエス様のよみがえりを信じる者は皆、死んでもよみがえるのです。なんと大きな希望でしょうか。私たちの体は一度死にますが、イエス様を信じる事によってよみがえることが出来るのです。この素晴らしい恵みを心から感謝しましょう。よみがえりを信じて歩む人は感謝と喜び、そして希望をもって力強く生きることが出来ます。でもそうでない人は、悲しみと絶望、そして死を恐れて生きて行くことになりま

さあ、イエス様のよみがえりを信じましょう。そして、感謝と喜びに満たされ、この事を多くの人々に伝えて行きましょう。

♪歌えイエスの勝利を♪ (プレイズワールド45)



聖書 ルカ24・13～34 テーマ エマオにて

序論

(金井)

信仰というのは不思議なものである。なぜ、イエスが復活して今も生きておられる救い主である、と私たちは信じられたのか。もちろん理屈もあるが、信仰には理屈を超えた神秘がある。有るものは有るのだ。先週はイエスの復活を最初に知った女性たちの話を学んだが、今日は不信仰な男性たちがイエスの復活を知った時の出来事を学ぼう。

一、さえぎられた目

主イエスが復活された日の午後、〈ふたりの弟子〉がエルサレムから11キロメートル余り西にある〈エマオという村〉に向かって歩いていった。彼らはイエスについて語り合い、論じ合っていた。すると、〈イエスご自身が近づいてきて、彼らと一緒に歩いて行かれた。しかし、彼らの目がさえぎられて、イエスを認めることができなかった〉。

彼らは自らのイエス観を語り聞かせた。彼らにとってイエスは〈力ある預言者〉であり、ローマ帝国の支配から〈イスラエルを救う〉政治的民族解放者であった。モーセが成し遂げたような解放Ⅱエクソダス(9・31)を、ユダヤの民衆はイエスに期待していたのである。その望みをかけたイエスが死んだので、彼らは失望し、〈悲しそうな顔をして〉いた。彼らの思考は全く世的、肉地的である。彼らの霊の目はさえぎられ、同行している人がイエスであることを認識できなかった。人間

は神について論じることではできても、自らの知力によって神を認識することはできないのである。

この弟子たちは、イエスが死んで「三日目によみがえる」と言っておられたことを、曖昧ながら憶えていた(9・22、18・33)。その〈三日目〉である(きょう)、〈仲間である数人の女〉がイエスの墓に行ったところイエスの体は見当たらず、天使が〈イエスは生きておられる〉と告げた、と言うのである！これはいったいどういうことか？彼らはエマオに向かって歩きつつ〈語り合い論じ合っている〉が、答えは出せなかった。

二、開かれた目

イエスは彼らを叱って言われた、〈ああ、愚かで心のにぶいたため、預言者たちが説いたすべての事を信じられない者たちよ。キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入るはずではなかったのか〉。神は旧約時代に預言者などに語られ、それが旧約聖書にまとめられた。旧約聖書のメシヤ(キリスト)像には苦難と栄光の二面がある。

イエスは〈モーセやすべての預言者からはじめて、聖書全体にわたり、ご自身についてしてある事どもを、説きあかされた〉。(モーセ)とはヘブル語聖書のモーセ五書(トーラー)のことであり、〈預言者〉とは預言書(ネビイーム)のこととである。ヘブル語聖書(旧約聖書)はトーラーとネビイームとクトゥービーム(諸書)の三つに分類される。この〈聖書全体〉がイエス・キリストを証しているという解釈を、この時イエスご自身が〈説きあかされた〉のである。この〈説

きあかされた〉と訳されているギリシア語の原語は、ドイツ語の「Hermeneutik」(釈義)、英語の「hermeneutics」(解釈学)の語源である。神は、御子イエス・キリストの生と死、復活、昇天によって旧約の預言を成就し、最も直接的な啓示を人類にお与えになった。新約聖書は歴史的なイエス像と正統的なキリスト論を伝えている。旧約聖書と新約聖書は神の霊感によって導かれた人たちが記したものである。聖書の言葉が聖霊の助けによって正しく解釈されて語られる時に、私たちは神を知ることができ、信じることができる。私たちの霊の目を開く聖霊の働きを照明と言ふ。

イエスが〈パンを取り、祝福してさき、彼らに渡しておられるうちに、彼らの目が開けて、それがイエスであることがわかった〉。人々が身分の違いを越えて共に食事をすることは、イエスの宣教の大きな特徴であった。主イエスは復活された日曜日の夕方にさっそく、以前と同様に給仕する者のように仕えて、パン裂きをなされたのである。そのお姿を見て、ようやく弟子たちの目は開かれ、このお方がイエスであることを認めた。

〈すると、み姿が見えなくなった〉が、弟子たちの顔は輝いていた。彼らは言った、〈道々お話しになったとき、また聖書を説き明してください。さうしたとき、お互いの心が内に燃えたではないか〉。

結論

主イエスは今も私たちと共に歩み、み言葉によって私たちを教え、導いておられる。主のみ言葉によって私たちの心も燃やしていただく。

研究資料

(中島)

テキスト

13 ふたりの弟子 一人の名はクレオパと18節にある。十字架のそばにはクロパ(クレオパのヘブル読み)の妻マリヤがいた(ヨハネ19・25)。4世紀ころ頃の教父エウセビオスによればイエスの父ヨセフの兄弟もクロパである(両者が同一である可能性もある)。もう一人の弟子は、妻マリヤであったのかも知れない。エルサレムから七マイルばかり離れた60スタディオン(約11km半。1スタディオンは192m)。エマオという村。正確な位置は不明。読みが似ている地名では、ヨツパに向かう途上にアムワスがあるが、距離が20マイル(約32km)も離れている。エルサレムの西3.5マイルにはアツマウスと呼ばれた場所があり、そちらを推す注解者もいる。その場合は距離が半分となり、ルカは往復の距離を記したことになる。

15 イエスが自身が近づいてきて 失意の中にある彼らに、イエスの側から近づいてくださった。霊の目。イエスの見かけが以前と変わっていたのではなく、霊的な理由で弟子たちはイエスを認めることができなかったのである。

21 イスラエルを救うのはこの人であろうと この弟子たちはイエスを単なる力ある預言者としてだけでなく、ある種の救い主と見ていた。しかしそれは当時の一般的な見解である「神の民、すなわちイスラエル」を敵の手から救い出す救い主であり、その望みはイエスの死によって、消え去つ

ていた。きょうが三日目なのです 彼らは、イエスが以前、ご自身の死の3日目に何かが起こると語られたのを、おぼろげに覚えていたのであろう。にもかかわらず、数々の出来事から何も悟らなかつたのは、霊的に鈍感と言わざるを得ない。

22 わたしたちを驚かせました 霊が鈍くなつていた彼らにとっては嬉しい驚きではなかつた。

23 女性たちの喜びの報告も、弟子たちに主の復活を信じさせるには至らず、かえって彼らの悲しみを増し加えただけであつた。

24 わたしたちの仲間が数人 墓へ行ったのがペテロ単独ではなかつたことがここから分かる。

25 ああ 非常に強い感情を表す感嘆詞(9・41、使徒13・10参照)。預言者たちが説いたすべての事間違つたメシヤ(キリスト)理解が、間違つたイエスの死の解釈につながり、その結果が失望となつた。それを正すため、イエスは聖書に基づく正しいメシヤ理解を弟子たちに語つた。

26 キリストは必ず、これらの苦難を受けて、その栄光に入る これが預言者の指し示すキリスト像であつた。苦難は、栄光のために必要な筋道であつたのである。しかし当時のユダヤ社会にメシヤと苦難を結びつける思想があつたかどうかは疑問である。むしろ一般的には、苦難は国家・民族と結びつけられ、メシヤはその苦難からの解放をもたらす使者として期待されていたのである。

27 モーセやすべての預言者からはじめて 旧約聖書は律法(モーセ五書)、預言書、諸書(詩篇など)の三つに分類される。聖書全体にわたりの「聖書(グラファイス)」は「諸書」の意もあるが、

ここでは旧約聖書全体ととらえるのが妥当。

28 なお先へ進み行かれる様子であつた このようにして相手に、もてなしを申し出る機会を与えることは、礼儀になつたことであつた。

29 しいて引き止めて 旅人へのもてなしは宗教的にも高位の美德であつた。夕暮になつておりその日のメインの食事をする時間。五千人の給食も「日が傾きかけた」(9・12)頃であつた。

30 パンを取り、祝福してさき 普通はその家の主人がする作業を、ここではイエスが行つた。これは弟子たちに、前述の五千人の給食、さらに最後の晩餐(22章)を思い出させたであろう。

31 彼らの目が開けて その呼び覚まされた記憶が彼らの目を開き、イエスを認めるに至つた。するとすぐにイエスは見えなくなつたが、そのことはもはや彼らに悲しみをもたらさなかつた。

32 お互いの心が内に燃えたではないか 単なる心の高揚ではなく、それ以上のもの。バークレーは「心が不思議と暖かくなつた」と訳す(これはウエスレーのアルダスゲイトの回心を思い出させる)。この弟子たちのように、後代の信者たちもまた、よみがえられた主の臨在を認めるところから、内なる心の燃え上がりを経験するのである。

33 彼らはその喜びを仲間たちに伝えずにはいられず、せつかく来た道を、すぐに引き返した。

34 シモンに現れなかつた ルカは詳しく記していないが、おそらく12節から15節の間に、ペテロ(シモン)に対する顕現がなされたのであろう。それは1コリント15・5の証言とも合致する。

参考文献 4月5日分と同じ。

聖書
タイトル
暗唱聖句ルカ24・13〜34
エマオにてイエスご自身が近づいてきて、
彼らと一緒に歩いて行かれた。

ルカ24・15

目標

復活の主が今も共に歩いてくださることを信じよう。

導入

(飯田)

皆さんの生活は毎日楽しい事ばかりですか？そうではないと思います。友たちとケンカをして気まぐらくなったり、悲しい出来事にあつたりすることがあるでしょう。その時、誰かがそばにいて励まし、慰めてくれたらどうでしょう。そして、「大丈夫だよ。ぼくはどんな事があっても君と一緒にいるよ」って言うてくれたら涙が出るほど嬉しいですね。皆さんには、そんなお友だちがいますか？今日は是非、皆さんといつも一緒にいてくださる方を知って欲しいのです。

イエス様が分からなかった弟子たち

先週は、イエス様がよみがえられた事を信じ伝えた婦人たちのお話を聞きました。今日はその後、イエス様が二人の弟子に現れたお話です。

二人の弟子たちは、イエス様がよみがえられた日に、エルサレムから11キロ離れたエマオに向かつて歩いていました。すると、そこによみがえったイエス様が現われて、二人と一緒に歩き出されたのです。しかし、弟子たちはそれがイエス様だと分からなかったのです。なぜなら、16節にあるように

「彼らの目がさえぎられて」いたからです。彼らは、イエス様がよみがえられた事を聞いてはいましたが、それを信じる事が出来ないでいたのです。ですから、彼らは暗い顔をしていました。彼らの心はただ、イエス様が死なれたという悲しみでいっぱいだったのです。イエス様のよみがえりは言葉だけではわからないものです。これを信じる者だけが、その中にある素晴らしい事を知ることが出来るのです。疑っている人は、いつまでたつてもよみがえりのイエス様に出会うことは出来ないのです。

イエス様が分からなかった弟子たち

イエス様は、その二人の弟子たちからいろいろと話を聞きました。そして、二人がよみがえりのイエス様を信じることが出来ないことを嘆かれたのです。彼らは、前から預言者がイエス様のよみがえりについて語っていたことを信じられないでいたのです。皆さんの中には、もう何回も教会学校で、イエス様の十字架とよみがえりを聞いている人がいると思います。どうでしょう、よみがえりのイエス様を信じていますか？それとも、この弟子たちのように信じられないでいますか？信じられないでいた弟子たちでしたが、イエス様は直々に、聖書全体からご自分について書かれてある事を説明されたのです。恐らく、イエス様は信じきれない弟子たちに、身振り手振りで分かりやすくお話されたことでしょう。話をしている間に、イエス様と弟子たちはエマオに到着しました。二人はイエス様に、村で一緒に泊まるように勧めて家に入りました。一緒に食事の席についた時、イエス様は祈りをささげ、パンを裂いて二人に渡した

のです。イエス様はご自分が十字架にかかられる前にも、弟子たちを集めて食事をしている時に、これと同じ事をされました。二人の弟子はこの光景を見て、「これはどこかで見た事がある。あつ！イエス様が行われたことだ」と思ったに違いありません。その瞬間、彼らのさえぎられていた心の目は開け、「この方はイエス様だ」とはつきりと分かったのです。聖書には、イエス様について多くの事が記されてあります。私たちが本当にイエス様を知りたければ、疑われないで聖書を読み、また聖書のお話を聴くことです。神様は必ずよみがえりのイエス様のことを分かるようにしてください。

イエス様は私たちと一緒に歩まれる

よみがえりのイエス様は、信じきれないでいた弟子たちと一緒に歩まれましたが、イエス様は皆さんと今も一緒に歩んでくださっておられます。そして、イエス様を信じている人はますます、イエス様の事を知ることが出来るように助けてくださいます。そしてまだ信じられないでお友だちをも教会学校に導いて、イエス様を知る事が出来るようにしてください。イエス様が天に上げられる時「わたしは世の終わりまで、あなたと共にいる」と言われました。

まとめ

よみがえりのイエス様は、目には見えませんが今も生きておられます。そして、私たちと一緒に歩んでくださっています。イエス様と一緒に歩む人は、苦しい時も悲しい時も、力と希望が与えられます。よみがえりのイエス様を信じましょう！
♪主イエスとともに♪ (子どもさんびか18)



聖書 ルカ24・35〜43 テーマ エルサレムにて

序論

(金井)

イエスの復活とは何か？ 今日に至るまで多くの論議がなされてきた。それは弟子たちの霊的あるいは精神的、心理的な経験に過ぎないという人もいる。しかし、聖書はイエスの肉体が復活した事実を明示している。この真理を理解したい。

一、主イエスの顕現

エマオで復活されたイエスに出会った二人の弟子は、「すぐに立ってエルサレムに帰って」、「十一弟子とその仲間が集まって」いる家に行った。すると、その弟子たちも、「主は、ほんとうによりみがえって、シモンに現れなされた」と言うではないか！そこで、二人の弟子はエマオに行く「途中であったことや、パンをおさきになる様子でイエスだとわかったことなどを話した」。

すると、「イエスが彼らの中にお立ちになった」。そして、イエスは彼らに「やすかれ」と言われた。その時、弟子たちはユダヤ人の迫害を恐れて、家の戸をすべて閉め切っていた(ヨハネ20・19)。それなのにイエスがそこに入って来られたので、彼らは「恐れ驚いて、霊を見ているのだと思った」。(そこでイエスが言われた、「なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか。わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。さわって見なさい。霊には肉や骨はないが、あなたがたが見るとおり、わたしにはあるのだ」。

イエスは彼らに両手両足と脇をお見せになった。その手と足には十字架にかけられた時に打たれた釘の傷跡があり、脇には槍で刺された傷の跡があった。影武者のような似せ者ではない。そこにおられるのは確かに主イエスご自身であった。

二、主イエスから賜る平安

「やすかれ」というのはユダヤ人が日常使っているあいさつの言葉だが、主イエスは、恐れと疑いに支配されている弟子たちの心をご自身の顕現とみ言葉によって解放し、彼らに全き平安をお与えになった。

この復活されたイエスとの出会いが無ければ、ユダヤ人の迫害を恐れて隠れていた弟子たちが、エルサレムの市中で大勢の人々に宣教をすることができたろうか？殉教の死を遂げるまで命がけでイエスの御名を伝えることができたろうか？復活されたイエスの実在こそ、弟子たちの信仰の核心であり、この復活体験が彼らの心から恐れを取り去って、宣教を可能にしたのである。

主イエスの宣教は真の平安を人々にもたらすものである(10・5〜6)。キリストの福音は安っぽい気休めの言葉とは違う。福音は実在される主イエスご自身から発せられる、力ある霊の言葉である。イエスは弟子たちに言われた、「安かれ。父がわたしをおつかわしになったように、わたしもまたあなたがたをつかわす」(ヨハネ20・21)。主イエスは弟子たちの心を平安で満たして、彼らを宣教のために遣わされたのである。

私たちも不信仰に陥り、恐れと疑いに心を支配

される時があるかもしれない。しかし、そのような時にも主イエスはご自身の確かな臨在を示し、み言葉と御霊によって私たちの心に平安を満たしてください。

三、主イエスから賜る喜び

イエスがお体を提示された時、弟子たちは「喜びのあまり、まだ信じられないで不思議に思っていた。すると、イエスが「ここに何か食物があるか」と言われた。彼らが焼いた魚の一きれをさしあげると、イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた」。

主イエスは焼き魚を食べることによって、復活の身体性を明示されたのである。弟子たちは口をあんぐりと開けて、その様子を見入っていたのではないか。ここにイエスのユーモアを感じるではないか！ペテロにはこの出来事が印象深く残ったようであり、彼は復活されたイエスと食事をしたことを、後にカイザリヤで話している(使徒10・41)。古代教会にはイエス・キリストの身体性を否定する仮現論を説く異端者との戦いがあったので、この復活体験は貴重な証拠となった。

主イエスに出会った喜びは泉のようにあふれ、川となって流れ出る。これが真の福音である。

結論

主イエスは事実、肉体をもって復活された。神は同様に私たちにも復活・栄化の恵みを与えてくださる。この希望のゆえに私たちは平安を保ち、喜びをもって、この生ける救い主を証しよう。

研究資料

(中島)

34 36節の短い3節の中に3種類の顕現についての記述がある。前の二つがクレオパラ二人の弟子とペテロ、それぞれに対する個人的な顕現であったのに対し、三つ目はエルサレムでたくさんさんの弟子たちに対してなされた顕現であった。

テキスト

35 ふたりの者 エマオ途上で復活の主と出会った二人の弟子は、自分たちが経験したことを仲間たちに伝えた。特にパンを裂く様子でイエスだと分かったことを、彼らは強調した。

36 こう話していると この記事がエマオ途上の記事から切れ目なくつながっていることが、このつなぎの言葉で分かる。イエスが彼らの中にお立ちになった イエスの登場は突然であった(ヨハネ20:19参照)。そして「やすかれ」と言われたこの部分に「」が付いているのは重要な写本の一つ(ベザ写本)でこの部分が欠けているからである。しかし近年の研究はこの部分がオリジナルであることを支持するようである。

37 彼らは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思っ た イエスの「やすかれ」とのあいさつとは正反對に、弟子たちはパニックに陥った。霊(プニユーム)はここでは「幽霊」の意。

38 なぜおじ惑っているのか。どうして心に疑いを起すのか この弟子たちも、エマオ途上の弟子たちの場合と同様に、「愚かで心のにぶいたため：信じられない者たち」(25)であった。

39 わたしの手や足を見なさい 手と足を示した

のは十字架で釘打たれた個所だからであろう(ヨハネ20:25、27参照)。まさしくわたしなのだ 直訳すれば「(そうすれば)それが本当にわたしであることが(分かるだろう)」。霊には肉や骨はないが：わたしにはあるのだ ここでイエスはご自身の復活の体の物質的(身体的)な性質を強調された。それは肉も骨もあり、見ることも触ることもできる。このことはパウロの言明「肉と血とは神の国を継ぐことができない」(1コリント15:50)と一見矛盾するように思えるが、そうではない。パウロの関心は、死者のよみがえりの後、神の国に住まう時に賜る新しい体の性質についてであり、ここに記されているのは、復活のイエスが、昇天なさる前に地上で顕現された時の状態だからである。イエスは肉体を持ちつつも、普通の人にはできない方法で、現れたり消えたりした。この個所とパウロの言明とに共通するのは、復活は体と密接な関係があり、霊魂だけで体が伴わないものではないということである。

40 こう言って、手と足とをお見せになった この部分の「」も36節と同様である。

41 彼らは喜びのあまり、まだ信じられないで： イエスが示された手と足を見ても、まだ信じられない者たちがいた。不信の理由は、喜びのゆえである。信じるには喜ばしすぎる、話が出来すぎて

いる、というのである。そんな弟子たちのために、イエスは最後の証拠を用意された。すなわち、ここに何か食物があるか と尋ねられたのである。

42 焼いた魚の一きれ エルサレムは海から離れているが、塩漬けの魚が運ばれ、容易に手に入れ

ることが出来たようである。

43 イエスはそれを取って、みんなの前で食べられた イエスが弟子たちの前で魚を食したことは、イエスが単に霊だけの存在ではなく、肉体を有しておられることの証拠であったが、それ以外の意味を指摘する注解者もいる。それは五千人の給食(9章)との関連である。エマオ途上の弟子たちは、パンを裂くイエスの姿を見て、それがイエスであることに気付いた。五千人の給食ではパンと魚が提供されたが、ここではそのもう一方、魚に焦点が当てられている。つまり魚をイエスが食する様子を見ることによって、弟子たちがイエスを認めることが出来るようにされたのである。

このように、エマオの二人の弟子たちの記事と、このエルサレムでの弟子団への顕現の記事とは、共通する要素がいくつかある。エマオの弟子たちは、旧約聖書に預言された救い主についての解き明かしと、五千人の給食を思い出させるパン裂きの様子によって初めてイエスに気付いた。それと比較して考えると、エルサレムでの弟子たちは、五千人の給食を想起させる魚を食するイエスを見たが、彼らの信仰が熟すためには、まだもう一つのことが必要であることが分かる。すなわち聖書の解き明かしである。そしてそれは続く44節以降で、イエスの口から告げられるのである。

エマオの記事とこの個所との両方で描かれているこれらのことは、初代教会にとって大切な要素となった。すなわち聖餐とみ言葉の宣教であり、それを今日の私たちも受け継いでいるのである。

参考文献 4月5日分と同じ。

26日 礼拝メッセーじ例

聖書 ルカ24・35～43
タイトル エルサレムにて
暗唱聖句 わたしの手や足を見なさい。まさしくわたしなのだ。
目標 ルカ24・39
からだのよみがえりを信じる。

導入 (飯田)

イースターはイエス様を信じる者にとつては大きな喜びです。この喜びを一回や二回で伝え切ることは出来ません。ですから、今朝もよみがえられたイエス様にある喜びを、皆さんと味わいたいと願っています。

イエス様を疑う弟子たち

ある牧師が、「信じれば、信じる如くなるものを、懷疑で終わる、人の一生」と歌いました。「信じれば信じたようになるのに、疑って終わるのが人の一生だ」と言うことです。これは、疑うことがどんなに愚かなことかということを表現しています。イエスがよみがえられたことを、しばらく学んでいます。婦人たちや弟子たちは、イエス様のよみがえりを信じられませんでした。特に今朝の箇所では、イエス様が弟子たちの真ん中に立ち、声を掛けられているにも関わらず、彼らはイエス様だと分からず、亡霊だと思って恐れたのです。イエス様は弟子たちに、「なぜ、恐れているのか。どうして疑うのか」と嘆いておられます。イエス様はこの事を非常に悲しまれたのではないでしょう。皆さんは、どうですか？イエス様のよみがえりを信じていますか。それとも、心のどこかで

「本当かな？まだ信じられないなあ」と思っていないでしょうか。イエス様はその心をご存知です。でも、信じられないから自分は駄目だと思わないでください。皆さんの罪のために十字架にかかり、3日目によみがえって喜びと希望を与えてくださるイエス様を、心から信じられるように祈ってください。神様は必ずその祈りに応えてくださり、よみがえりのイエス様を信じる事が出来るようにしてください。

イエス様のよみがえりの姿を見た弟子たち

弟子たちはよみがえりのイエス様を信じる事が出来ませんでした。その弟子たちに対してイエス様は、「もう、お前たちには分かってもらわなくてもいい」とは思わないで、何とか自分を分かってもらおうとされました。そして、イエス様を亡霊だと思っている弟子たちに、ご自分の手と足を見せられました。しかも、それだけではなくご自分の手足に触らせられたのです。弟子たちの手は、イエス様のぬくもりが感じられたに違いありません。しかし、彼らはまだ不思議がっていました。イエス様は次に、焼いた魚を食べられたのです。もし、よみがえりのイエス様が亡霊であつたら、食事をされるでしょうか。弟子たちは、亡霊ではなくちゃんとした体をもってよみがえられた、イエス様の姿を見たのです。そして、イエス様はエマオの途上で、二人の弟子たちにご自分の事を説明されたように、エルサレムにいる弟子たちにも、聖書に記されていることは必ず実現すると説明されたのです。また、弟子たちが聖書のことを理解できるように、彼らの心の目を開かれ、メシヤが

十字架にかかり3日目によみがえること、そして、イエス様の名による悔い改めが、多くの国々に宣べ伝えられることを語りました。

弟子たちはよみがえりのイエス様の体を生で見ただけではなく、それに触れ、そしてイエス様から直々に聖書の話聞いたのです。信じないで疑うことしれない弟子たちに対して、よみがえりのイエス様は、懇切丁寧にご自分のよみがえりを説明されたのです。ここにイエス様が「わたしが死からよみがえったのだ」ということを知って欲しい、信じて欲しいと言う熱い思いが伝わってきます。その思いは、皆さんにも向けられているのです。

イエス様のようによみがえる私たち

よみがえりのイエス様は、亡霊ではありませんでした。ちゃんと私たちと同じように体をもっておられました。イエス様を信じる者は誰でも、一度は死んでもまたよみがえるのです。その体は亡霊の姿ではなく、よみがえりのイエス様と同じように手と足を持った体としてよみがえるのです。つまり、よみがえりのイエス様を信じる者は、死んでもよみがえり、永遠の命をもって生きることが出来るのです。何と素晴らしいことでしょうか！

まとめ

よみがえりのイエス様は、この事を皆さんに信じて欲しいと願っておられます。よみがえりのイエス様を信じるならば、皆さんの人生は大きく変わります。それは、喜びと勇気と力に満ち溢れたものになるのです。

♪歌い続けよう主の愛を♪(子どもさんびか77)



聖書 ルカ24・44～49

テーマ 父の約束

序論

(金井)

主イエスの復活について続けて学んできたが、今日は、イエスの死と復活によって成就した救いを、全世界の人々に伝える宣教について学ぼう。

一、旧約聖書のメシヤ預言の成就

主イエスは復活された後、エルサレムで弟子たちにお姿を現されて、旧約聖書を説き明かされた。「わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に話して聞かせた言葉は、こうであった。すなわち、モーセの律法と預言書と詩篇とに、わたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する」。

《詩篇》は「諸書」を代表する文書である。《モーセの律法と預言書と詩篇》とは旧約聖書全体を意味している。イエスは受難以前にも、旧約聖書のメシヤ預言がご自身において成就していることをたびたび教えておられた(4・21、他)。しかし、弟子たちはなかなか悟らない。そこで「イエスは、聖書を悟らせるために彼らの心を開いて言われた、「こう、しるしてある。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる。そして、その名によって罪のゆるしを得させる悔改めが、エルサレムからはじまって、もろもろの国民に宣べ伝えられる。あなたがたは、これらの事の証人である」。この時、主イエスは旧約聖書に記されたメシヤ預言の三つの要素について言及された。それは①受難、②復活、③世界宣教である。

二、全世界の諸国民への宣教

この壮大な救済史―世界宣教の計画を、専門的な聖書教育を受けたことのない「無学な、ただの人たち」(使徒4・13)である弟子たちが構想したとは考えられない。ペテロを筆頭とするイエスの弟子たちが、民族宗教であるユダヤ教の律法や慣習に束縛されていて、異邦人への宣教に消極的であったことは、使徒行伝を見れば明らかである。

イエスが復活された後も、弟子たちはイスラエルの政治的軍事的独立をイエスに期待する有り様だった(使徒1・6)。世界宣教は、復活された主イエスの教えと命令によって開始されたのである。

エルサレムにキリスト教会が誕生した紀元30年には、新約聖書はまだ無かった。初代教会のキリスト者は、主イエスから与えられた光に従って旧約聖書を解釈した。そして、それによって形成された教義と、使徒たちが証言するイエスの言行と、自らのキリスト体験を根拠として、彼らはイエスがメシヤ(キリスト)であることをユダヤ人や異邦人に論証したのである。

民族や人種、階級、国家、文化を超えた普遍的な世界宗教であるキリスト教の誕生は、偶発的な出来事ではない。これは神が計画され、長い歴史を経て準備され、御子イエスの受肉・受難・復活・昇天によって実現した画期的な出来事である。

三、聖霊を待ち望む祈り

イエスは世界宣教について教えられた後、弟子たちに命じられた、「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力

を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」。《約束されたもの》が聖霊であることは、この福音書の続編である使徒行伝に明記されている。「エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう」(使徒1・4～5)。

聖霊は「御父と御子とより出で」、遣わされたお方である(アタナシオス信条)。主イエスは聖霊の火が降る時を切実に待っておられた。「わたしは、火を地上に投じるためにきたのだ。火がすでに燃えていたならと、わたしはどんなに願っていることか」(12・49)。イエスは約3年間、弟子たちに神の国の真理を教え、宣教のために彼らを訓練されたが、彼らは未だに悟らない。聖霊の助けが無ければ、人は霊的な真理を悟ることができない。(上から力を授けられ)なければ、人はキリストの証しも救霊もできないのである。

イエスが天に昇られた後、弟子たちは命じられたとおりエルサレムに帰って、10日間、聖霊の降臨を祈り待ち望んだ。そして、聖霊が降られた時、そこにキリスト教会が生まれて、世界宣教が開始されたのである。

結論

私たちも神のみ心を悟り、神のみ業に用いていただくために、ひたすら聖霊を祈り求め、聖霊に満たしていただく。「天の父は…求めて来る者に聖霊を下さらないことがあるのか」(11・13)。

研究資料

(中島)

テキスト

44 わたしが以前あなたがたと一緒にいた時分に 弟子たちと共におられた地上でのこれまでの時間と、これから先の弟子たちと共におられない時間とを明確に区別した表現。モーセの律法と預言書と詩篇 詩篇は詩篇に代表される諸書を指し、律法、預言書、諸書で旧約聖書全体を表す(27節参照)。その聖書全体でわたしについて書いてあることは、必ずことごとく成就する のである。

45 聖書を悟らせるために 弟子たちは魚を食するイエスを見たが(42・43)、全き確信のためには、聖書の解き明かしが必要であった。彼らの心を開いて 聖書を開くことが心を開く鍵なのである。46・47 こう、しるしてある 「しるす」のみが直説法の動詞で、その他の「苦しむ」、「よみがえる」、「宣べ伝える(受動態)」は不定詞を用いて並列されていることから、ここでイエスが紹介する旧約聖書の預言の内容は以下の三つのことであることがわかる。①キリストの受難、②キリストの復活、③福音の全世界への伝達。その内容が③まで含んでいることを明確にするために、新共同訳ではこれらの部分が『』で囲まれている。①、

②については、7節、26節ですでに御使いやイエスの口を通して語られた内容と同じであるが、③はここで初めて登場する内容である。その部分の旧約聖書の裏付けとしては、イザヤ49・6「わたしはあなたを、もろもろの国びとの光となして、わが救を地の果にまでいたらせよう」などを挙げ

ることができる(ルカはそれを使徒13・47で引用している)。キリストは苦しみを受けて、三日目に死人の中からよみがえる 受難は復活の栄光のために必要な筋道であった。その名によって罪のゆるしを得させる悔改め 罪のゆるしを与える悔改めへの招きは、すでにバプテスマのヨハネによってなされていた(3・3)。しかし救いの歴史はそこから前進している。今ここで言われている悔改めとゆるしへの招きは、イエスの死と復活に根ざしたものだということが決定的な前進である。エルサレムからはじまって 福音宣教がエルサレムから始まるのは、そこが旧約の信仰の中心地だからである。さらにそこは十字架と復活の現場であり、また聖霊が降る場所でもある。もろもろの国民に宣べ伝えられる 「もろもろの国民に」は直訳すると「すべての国民(民族)」に。福音はユダヤ人、異邦人の双方を含めたすべての人に宣べ伝えられる。この救いのメッセーシの普遍性は、2・32ですでに「(イエスは) 異邦人を照す啓示の光、み民イスラエルの栄光であります」とシメオンの口から語られていたものである。

48 あなたがたは、これらの事の証人である 前節の「その名によって」は「キリストの代理人である人々によって」と解釈することもできる。たとえばパウロは「復活のキリストが」この国民と異邦人ともに、光を宣べ伝えるに至ることを、(わたしは) あかししたのです(使徒26・23)と言っている。このように福音宣教の主体はキリストであり、クリスチャンはそのキリストの代理人として、福音を証するのである。それはキリストの共同

体に連なるすべての者で分かち合うべき使命である。前述したように福音の全世界への伝達は旧約の預言であり、キリストの証人たちが宣べ伝えて初めて、預言が成就するのだからである。そしてそのために聖霊が降られるのである。

49 わたしの父が約束されたもの ここには聖霊という表現が登場しないが、使徒1・4・5から「約束」が聖霊を意味することは明白である。旧約聖書では終わりの日の聖霊の注ぎについて数多く預言されている(イザヤ32・15、ヨエル2・28等)。あなたがたに贈る 直訳は「わたし自身があなたがたに送る」(口語訳では「贈る」だが、新共同訳、新改訳にあるような「送る」のほうが原意に忠実であろう)で、送り主がイエスであることが強調されている。使徒2・33には「イエスは神の右に上げられ、父から約束の聖霊を受けて、それをわたしたちに注がれたのである」とある(ヨハネ16・7も参照)。上から力を授けられるまでは「授ける(エンデュオー)」の本来の意味は「着せる」で、「光の武具を着けようではないか」(ローマ13・12)、「主イエス・キリストを着なさい」(同13・14)と同じ動詞が用いられている。上からの力を着るまでは、クリスチャンは丸腰どころではない、裸なのである。あなたがたは都にとどまっていなさい

これがこの場面でなされている唯一の命令である。弟子たちはその命令に従って、イエスの昇天後もエルサレムにとどまり、約束の聖霊を待ち続けた。そして五旬節の日に、ついにその約束は実現したのである。

参考文献 4月5日分と同じ。

聖書 ルカ24・44～49
タイトル 父の約束
暗唱聖句 見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。
 ルカ24・49
目 標 父の約束を信じて祈ろう。

導入 (松浦み)

今日は何の日か知っていますか？ 日本国憲法が施行された記念日ですね。私たち一人一人が主役となつて生きる事が決められた憲法です。ですから中学校までは義務教育と言つて、だれでも学ぶことが出来ます。また信仰の自由も認められて、私たちは自由に教会に来ることができるのですよ。ゴールデンウィークで遊ぶ計画だけでなく、学ぶことも大切なことです。今、アーティクル・ナインと言つて日本国憲法第九条が世界の共通語になりつつあります。世界平和を考え、また祈る私たちでありたいと思います。

弟子たちに現れたイエス様

十字架の後復活されたイエス様は色々な方法でご自分の復活を証明されたことを学んできました。今日は弟子たちに現れたイエス様が言われた言葉から学びましょう。「わたしがみんなと一緒に生活していた頃のことを思い出してごらんさい。わたしは、わたしについて聖書に書いてあることは必ずそのとおりにと言っておきましたね」。弟子たちはボカンとした顔でイエス様のお話に耳を傾けていました。「モーセの律法と預言書と詩篇とに書いてあることは必ず成就する」と言われまし

た。それは一体どういうことでしょうか。イエス様が言われる聖書とは旧約聖書をさします。旧約聖書は39巻の本から出来ていますが、大きく三つに区分することが出来ます。モーセの律法とは創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の五書を指します。預言書とはヨシヤア記、士師記、ルツ記、サムエル記上下、列王記上下、歴代志上下、エズラ記、ネヘミヤ記、エステル記などの前の預言書、後の預言書としてイザヤ書、エレミヤ書、哀歌、エゼキエル書、ダニエル書、ホセア書、ヨエル書、アモス書、オバデヤ書、ヨナ書、ミカ書、ナホム書、ハバクク書、ゼバニヤ書、ハガイ書、ゼカリヤ書、マラキ書、詩篇とはヨブ記、詩篇、箴言、伝道の書、雅歌を指します。これらの聖書全体からイエス様はご自分について書いてあることを弟子たちに説き明かしてくださったのです。丁度パズルのようにイエス様についての預言が隠されているのですね。そして、それらはすべて成就したとお話しなさいました。

心を開いてくださるイエス様

しかし、弟子たちにはその意味がよくわかりませんでした。一生懸命イエス様のお話に耳を傾けたのですが…。私たちも同じようなことを経験します。聖書のお話がよく分からないのです。でもがっかりしないでください。イエス様は聖書を悟らせるために彼らの心を開いてくださったのです。それによって弟子たちの心の目が開かれ、旧約聖書に預言されている神のご計画を理解することが出来たのです。つまり「イエス・キリストは苦しみを受けて十字架にかかり、三日目に死人の中から

らよみがえる。そして、その名を信じる人々に罪のゆるしが与えられる」という神の救いのご計画が成就し、弟子たちは「私たちはこのことの証人なんだ！」と気づき、喜びに溢れたのです。

父の約束

イエス様は「聖書に書いてあるとおり、わたしが十字架で死んで三日目によみがえったことがわかりましたね。これからはだれでもわたしを信じる者は罪がゆるされるのです。あなたがたはこのことをあらゆる国の人々に宣べ伝えなさい」と、新しい使命を弟子たちにお与えになりました。そして、「その使命を果たすことができるようにわたしの父が約束されたものをあなたがたにプレゼントします。ですから、上から力を授けられるまでは、都にとどまつて待つていなさい」と、おつしやいました。父の約束とはなんでしょう。「聖霊」をあなたがたにおくるといふ約束です。よみがえられたイエス様はまもなく天にお歸りになられ、もう姿を見ることがもお話を聞くこともできません。しかし、やがて助け主である「聖霊」が来てくださるとき、弟子たちは力を受け、地の果てまで主の証人となつてイエス様を宣べ伝えるでしょう。その約束のとおり弟子たちは、イエス様が天にお歸りになつて後10日目の五旬節の日に聖霊を授けられ、勇気と喜びに満ち溢れてイエス様のことを宣べ伝えたのです。

私たちも、聖霊を授けられ、力強くイエス様を伝えることができるよう祈りましょう。

♪もちいたまえわが主よ♪

(ホーリネス子どもさんびか113)



聖書 出エジプト20・1～17 テーマ 祝福の道 母の日

序論

(金井)

母の日は、一九〇五年に米国東海岸の町ウエブスターで開かれたジャービス夫人の追悼記念会で、娘のアンナが列席者にカーネーションを配ったことから始まった。ジャービス夫人は26年間も教会学校の教師を務めた敬虔な人であり、この花を愛していた。

現代は心病める時代であり、幸せな家族関係の形成が大きな課題となっている。今日は、幸せな親子関係を築く道を聖書から学びたい。

一、神の律法に従う民

旧約聖書の最初の五書を「律法(トーラー)」という。「トーラー」という語の原意は「導き、教え」である。律法には①倫理道德②法律③祭儀など、人間の営み全般にわたる幅広い内容がある。律法は創造主なる神が人類にお与えになった絶対的な基準である。私たち人間は主(ヤーウエ)によって造られたものであるから、主が定められた法に従ってこそ良い生き方ができる。聖書は神の律法に従うことを「義」といい、従わないことを「罪」という(ロマ2・13、Iヨハネ3・4)。

出エジプト記20章に記されている「十戒」は律法の中心である。十戒は「わたしはあなたの神、主であつて、あなたをエジプトの地、奴隷の家から導き出した者である」という序文から始まる。主は「アブラハム、イサク、ヤコブとの契約を覚

え」て(2・24)、その子孫であるイスラエルの民をエジプトから解放された。主はこの民を特別に選んで聖別し、「祭司の国」(19・6)として用いて、人類を救済しようとなされた。

2枚の石板に書かれた十戒が与えられたのは三千年以上前のことであるが、律法は、霊的な真のイスラエルとして選ばれた私たちキリスト者(教会)にとつても重要な規範である(Iペテロ2・9、ガラテヤ6・16、マタイ5・17～18)。神の民は、神に選ばれ、贖^{あがな}われた恵みのゆえに、神を愛し、律法に従い、神の栄光を表して生きるのである。

二、神の律法を教える親

十戒は前半の四つが対神関係についての戒めであり、後半の六つが人間関係についての戒めである。神に対する恐れと愛があればこそ、人の歩みは正され、人間関係も良好に保つことができる。

古代イスラエルでは〈三、四代〉がまとまって居住する大家族が一般的であった。各家庭では、家長である父親または祖父が子どもに言葉を教え、律法を教えて、み言葉を暗唱させていた(申命記6・2、7)。箴言には、「主を恐れることは知識のはじめである……わが子よ、あなたは父の教訓を聞き、母の教を捨ててはならない」とある(箴言1・7～8)。神から委ねられた権威と責任をもって律法を教える親や祖父母に、子どもは尊敬を抱き、その教えに従うようになる。

信仰は教えと実践が車の両輪のように連動してこそ本物である。親があやしげな信仰生活をしていては、子どもに信仰の継承はできない。親たる

者はまず自分自身が聖書の教えに忠実でありたい。そして、教会だけでなく、家庭でも子どもに聖書教育を行いたい。

三、父母を敬う子ども

〈あなたの父と母を敬え〉という戒めは、人間関係の戒律の最初にある。家庭は社会の基礎を成しており、親子関係は特別に重要なものである。

「敬う」と訳される語の原意は「重んじる」である。現代の日本の家庭では、子どもは親の存在、親の考え、親の気持ちを重んじているだろうか。尊敬しづらい、問題のある親もいるだろう。しかし、神の戒めに従って父母を大切にする者には、必ず祝福がある。(これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである)。

律法には、「自分の父または母を撃つ者は、必ず殺されなければならない」、「自分の父または母のろう者は、必ず殺されなければならない」という規定もある(21・15、17)。

新約聖書でも、「もしある人が、その親族を、ことに自分の家族をかえりみない場合には、その信仰を捨てたことになるのであつて、不信者以上にわるい」と教えられている(Iテモテ5・8)。

結論

現代人は多忙であるが、工夫をこらして毎日、家族が共にみ言葉に触れることが大切である。これが、難しい思春期を越えて子どもが信仰を守り通す力となり、幸せな家庭を築く基となる。年輩いた父母にも尊敬をもって接し、大切にしよう。

研究資料

(井上)

十戒は古来、教会において、主の祈り、使徒信条と共に三要文と呼ばれ、信仰の基盤とされてきた。十戒は神に従う人生の指針となるものである。十戒は本聖書箇所と共に、申命記5・6・21に記されているが、双方は若干の相違を含んでいる。第四戒の安息日の戒めについて出エジプト記では天地創造の7日目に神が休まれたことが動機とされるが、申命記では民が出エジプトによって、奴隷から解放されたことの記念として守るべきことが述べられている。規定の背景は複数の観点から捉えうるということである。十戒は内容的に2区分されてきた。アウグスチヌスは2節から6節を第一戒と見なし、第一戒から第三戒までを神への義務、第四戒から第十戒までを人への義務であると考え、以来カトリック教会の区分となった。イエスの時代から少し後のユダヤ人史家ヨセフスは第一戒から第四戒までを神への義務とし、第五戒から第十戒までを人への義務とした。後者の区分がプロテスタント教会の伝統的な区分法である。

テキスト

2 あなたをエジプトの地、奴隷の家から導きだした エジプトのパロの権力、多神教の神々も大いなる神の前には空しいものであったことを、神は再びイスラエルの民に想起させられた。

3 わたしのほかに、なにものをも神としてはならない 十戒の第一戒は、神のたぐいのない至高性、唯一性が強調されている。民が神を捨て去ることはなかったとしても、他の偶像を神と等しく

する危険性を神は危惧しておられた。

4 刻んだ像を造ってはならない (4) 第二戒は物質としての偶像を禁じている。神は目に見えない霊的存在であることがその背景にある。

民が偶像にいかにか弱かったかは、十戒授与という重要な場面でも、金の子牛を造り、ほしいままに振舞った32章のできごとからも明らかである。

7 主の名を、みだりに唱えてはならない 第三戒は神の御名に関してである。神の名として旧約聖書ではヤハウェが六八二八回、エロヒームが二六〇〇回用いられている。神の名を唱えてはいけ

ないのではなく、御名が汚されるような「みだり」な唱え方が禁じられている。

8 安息日を覚えて、これを聖とせよ (8) 四戒は安息日についてである。人は礼拝と休息という神の聖なる日を忘れやすい。覚えて という語法は無条件、永続的な強調が含まれている。一般的な労働は6日間になされるべきであった。律法では神殿における祭司やレビ人の働きは禁じられず、病人の癒は許されていなかったが、家畜の救助などは許されていた(マタイ12・5・11)。

12 あなたの父と母を敬え 神に関する戒めが第四戒まで語られ、人に関する戒めが第五戒からとなる。初めに両親を敬うことが述べられる。人と関わりの最初に親子関係が出てくる。社会の最も基礎となる関係である。敬う(カバード)という言葉は、重い、重んじるという語に由来している。敬うとは人間のみならず、神に対して用いられる(イザヤ29・13他)。このように敬うとは宗教用語であった。両親を敬うことは、神聖なことなのである。戒

めには長寿が約束されている。旧約において長命は富や栄誉にも等しい神の祝福である(箴言3・16)。

13 殺してはならない 第六戒は生命の尊重である。生命は人間の最も大切な所有であって、どんな理由があっても侵してはならない。

14 姦淫してはならない 第七戒は正しい性のあり方である。姦淫する(ナーアフ)という言葉は、通例、既婚者が伴侶者以外の相手と不道徳を犯す場合に用いられる。神が男と女に創造された人格的な交わりが、正しく保たれていくことが求められている。

15 盗んではならない 第八戒は所有が侵されないことを命じる。明白な盗みは否定のしようがないが、搾取、横領など、現代は巧妙に盗みが行なわれていることが、さらに問題である。

16 隣人について、偽証してはならない 第九戒は偽りを禁じている。字義的には「偽りの証人として、あなたの隣人に不利に答えてはならない」と訳される。法廷での偽証が念頭にありますが、一般的に広く解釈されるべきである。

17 隣人の家をむさぼってはならない 第十戒はむさぼりの罪である。むさぼる(ハーマド)は奪い取るという意味がある。食欲について戒められているが、人の内にある動機、意志に関わる精神面が問われている。食欲とは、与えられているもののへの感謝と満足を忘れ、必要を満たされる神を見失った生き方なのである。

参考図書 『Word Biblical Commentary Exodus』 John I Durham (Word Books) 他

聖書 出エジプト20・1〜17
 タイトル 祝福の道（母の日）
 暗唱聖句 あなたは父と母を敬え。
 出エジプト20・12
 目標 母に感謝し、共に主の道を歩もう。

導入

（松浦み）

今日は、母の日ですね。いつも私たちによいことをたくさんしてくださるお母さんに「ありがとうございます」という日です。幼稚園のお友だちは何かプレゼントを作ったかもしれませんね。小学生や大きいお友だちはお母さんの喜ぶお手伝いをしたり、お料理など作って感謝を表すことができるでしょう。皆さんの知恵を出して、心を込めてこの日を過ごしてくださいね。また、お母さんのいらつしやらないお友だちも、今日のお話を聞いて神様に感謝を表すことができるのです。

母の日の起り

母の日はいつ始まったのでしょうか。これは一人の女の人が、亡くなったお母さんを偲んでカーネーションを飾って母の愛に感謝を表したことから始まりました。やがてそのことがアメリカの大統領の耳に入り、ウィルソン大統領が五月の第二日曜日を「母の日」として決める書類にサインしてアメリカの行事として始まったのです。このアメリカで起こった行事が、私たちの国にも広がり定着してきたのです。

母の日物語

それは今から95年ほど前のことです。ジャービス

スさんという女の人が、アメリカのウエスト・バージニア州のある教会で教会学校の先生をしていました。その生徒の中に娘のアンナさんもいました。ある時、モーセの十戒を勉強することになったのです。その日の学びは5番目の、「あなたの父と母を敬いなさい」でした。ジャービス先生は、皆に質問しました。「なぜ神様は『あなたの父と母を敬え』という戒めをお与えになったか考えてみましょう」「はい、お父さんもお母さんも何でも知ってるし、仕事をしたり、家族のために色々働いてくれるから偉いんだと思います」「そうねえ、お父さんもお母さんもみんなのためにいろいろなことをしてくださいますね。病気をしたときなどは夜も寝ないで看病してくださるでしょう」「先生、でもお父さんやお母さんは子どもの世話をするの当たり前でしよう」「そうですね。当たり前だからといって感謝しなくていいのでしょうか」「わかったわ。神様は子どもが当たり前だと思って感謝しなくなるといけないから、この戒めをくださったんだね」「そういうことも考えられますが、他の考えはありませんか？」「…」「お父さんやお母さんはみんなが言ったように色々とお仕事があります。特に子どもと一緒に過ごすことの多いお母さんには、もっと大きなお仕事があるのです。それは子どもを元気で知恵ある賢い子に育てることです。それから、もう一つは子どもが神様を信じて、神と人々に喜ばれ、世に役立つ人になるように教えたり導くことです。ですから、時々叱ったり、いやな手伝いをさせたりすることがありますね。けれども、それは子どもたちが良い

子に育つようにと訓練しているのです。ですから、神様は特別にこの戒めをお与えになり、従う者には長寿を約束されました。では、皆さんでお母さんありがとうという感謝の気持ちや、敬う心を表す方法を考えてみましょう。ジャービス先生は子どもたちにこのように語り、何十年もたつて年老いて亡くなりました。娘のアンナさんは亡くなったお母さんを記念して思い出を語り合う会を開きました。「皆さん、今日は母が天国に行つて丁度一年です。皆さんと一緒に母を偲びたいと思います。どうぞ、テーブルに用意した茶菓を召し上がってください」「ありがとうございます。あら、アンナさん今日のお花は全部カーネーションですね」「ええ、母の一番好きな花でしたので飾ってみました。実は母が教会学校の教師をしていた頃、生徒にお母さんに感謝を表す方法を考えてみましょうと宿題を出したのです。その答えがこのカーネーションなのです」「すばらしいわ。感謝の気持ちのカーネーションなんて、天国のお母さんも喜んでおられることでしょう。ねえ、皆さん、私たちもみんな揃つてお母さんに感謝を表す日を決めませんか。この話はだんだん広がり、デパートの経営者ジョン・ワナメーカの耳にも入りました。彼も教会学校の先生でしたので、自分のデパートで母に感謝する日を五月第二日曜日に開き、カーネーションをプレゼントしました。やがてこのことが教会だけでなくアメリカ全土に広がり、母の日となったのです。神様は、聖書を通して私たちの歩みを正しく導いてくださることを感謝し従っていきましょう。♪主にしたがいゆくは♪（賛美歌21 507）



聖書 使徒1・1～11 テーマ 証人への道

序論

(金井)

今年度は前半に13回「使徒行伝」をテキストとして学ぶ計画になっている。この書は教会の原点、教会の本質を知るために最も重要な文書である。「使徒行伝」から、主が計画して、建て上げておられる「教会」について、共に学んでいきたい。

一、父の約束

本書執筆の歴史的事情は冒頭に明記されている。「使徒行伝」は「ルカによる福音書」の続編としてルカが執筆した文書である。著作年代は紀元60年代前半と考えられる。ルカは〈第一巻〉において、イエスの降誕、少年期、宣教、十字架の死、復活、顕現、そして、昇天を記した。

その第一巻を閉じるにあたって、彼は主イエスが語られた次のみ言葉を記した。「見よ、わたしの父が約束されたものを、あなたがたに贈る。だから、上から力を授けられるまでは、あなたがたは都にとどまっていなさい」(ルカ24・49)。そして、ルカは第二巻の初めにこの〈約束〉を再度記し、説明を加えている。(エルサレムから離れないで、かねてわたしから聞いていた父の約束を待っているがよい。すなわち、ヨハネは水でバプテスマを授けたが、あなたがたは間もなく聖霊によって、バプテスマを授けられるであろう)。

この〈約束〉の成就、すなわちイエスの弟子たちが(聖霊によって、バプテスマを授けられ、「上

から力を授けられる」ことが、教会の誕生と世界宣教の必須条件だったのである。

この「約束されたもの」を受けるために弟子たちが為すべきことは、「都にとどまって」、「待つてい」ることであった。この〈ガラリヤの人たち〉は(エルサレム)で復活されたイエスにお会いしていながら、都を離れて故郷に帰り、漁師に戻ってしまった(ヨハネ21章)。主を裏切った自分にはもう〈使徒〉、〈弟子〉の資格は無いし、もう宣教をする自信も無いと、彼らは自己絶望に陥った。それでも主イエスは、彼らの手によって主の宣教の働きを継続することを定めておられた。それゆえ主イエスは、慰めに満ちたみ声をもって彼らを再びエルサレムに送り返されたのである。

私たちは今どこにいるのだろうか？ 自分の力に頼っていたらずらに走り回っているのか？ 疲れて自分で自分に失望し、逃げて自分の殻にこもっているのか？ 主イエスは、この弱く愚かな、情けない私たちを責めてはおられない。主はあえてこんな私たちを選ばれたのである。私たちも、約束の御霊を求めて、祈り、待ち望もうではないか！

二、聖霊によるバプテスマ

弟子たちはエルサレムで(一緒に集まった)。ところが、彼らはなおもイエスが(イスラエルのために国を復興なさる)ことを期待した。3年余り主イエスと共に生活して学び、ご復活の後も旧約聖書に記された神の計画を説き明かされたのに、彼らはまだ悟らない。「真理の御霊」(ヨハネ16・13)に導かれなければ、本物の宣教はできないし、

本物の教会は建て上げられないのである。

弟子たちはすでに聖霊の力によって宣教をした経験があった(ルカ9・1～6)。しかし、彼らはさらに「聖霊の中に浸される」(5節直訳)必要があった。バプテスマのヨハネはヨルダン川で彼らを水に沈めた。その如く、今や彼らは聖霊漬けにされて、聖霊の圧倒的な力を受けるのである。

三、キリストの証人

イエスは弟子たちにこの聖霊の恵みを語られた。(ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであろう)。聖霊は弟子たちを力に満たして、「(地のはてまで)イエス・キリストを証しする証人と変える。イエスは全天地、全人類の主であり、救い主である。聖霊の力によって(エルサレム、ユダヤ)という民族的枠組みは打ち破られ、全世界にキリストの教会が拡大していくのである。

結論

現代の教会では多様な活動が展開されている。それは良いことであろう。しかし、ともすると、周辺の・付属的な活動に振り回されて、教会独自の使命が見失われ、中心的な営みがおろそかになることも無いわけではない。その結果、教会そのものが沈滞し、消失することさえある。主イエスが再び天から降って来られる日は近い。今こそ私たちが聖霊の満たしを祈り求め、聖霊の力によって(地のはてまで)キリストを証していこう！

研究資料

(井上)

新約聖書中唯一の歴史書である使徒行伝は、イエス昇天後の聖霊降臨、教会の誕生、発展を動的に描いている。

テキスト

1 テオピロ 献辞を受けているテオピロについて伝承は多々あるが、地位も名譽もあるギリシヤ人或いはローマ人であること以外に、詳細は不明である。**わたしは先に第一巻を著わして** ルカによる福音書は同じテオピロに献呈されており(ルカ1・3)、著者である「わたし」はルカ、「第一巻」とはルカによる福音書を指している。使徒行伝の執筆年代はルカによる福音書記述直後、紀元60年代半ばに書かれたと示唆される。

2 聖霊によって命じた イエスの弟子たちへの宣教命令は各福音書巻末に残されているが、最も詳しいものがマタイ28・18〜20の大宣教命令である。**3 数々の確かな証拠** A・T・ロバートソンはイエスの復活後昇天までに、聖書中11回の顕現があったことを示している。恐らく書き残されていない事実はそれ以上であったであろう。

4 父の約束 聖霊がくだることは、旧約の預言者によって(ヨエル2・28〜32)、バプテスマのヨハネによって(マタイ3・11〜12)、イエスご自身(ヨハネ16・7)によって語られていたが、直接神ご自身の約束によって成就するのである。

5 聖霊によって、バプテスマを授けられる ヨハネのバプテスマは水による悔い改めのバプテスマであったが、イエスのバプテスマは聖霊による

潔めと、命と力のバプテスマである。

6 イスラエルのために国を復興なさる エマオ途上の弟子も「イスラエルを救うのはこの人であろうと、望みをかけていました」(ルカ24・21)と語っている。弟子たちはユダヤ人が持っていたメシア観に基づいて、地上のイスラエル王国の再興を願っていた。イエスが示され、完成される霊的、普遍的な神の国の実現に未だ目が開かれていなかった。

8 聖霊があなたがたにくだる時 聖霊がくだるという表現は、聖霊を指すプニユーマが70回用いられている使徒行伝中に4回しか出てこない。ペンテコステの聖霊の傾注の特殊性が示唆される。**力を受けて** 力は、ダイナミイト命名の由来となる有名なデユナミスが用いられている。**エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のほてまで** 聖霊の傾注による宣教範囲が示される。まず弟子たちの足元となるエルサレム、周囲のユダヤ、サマリヤへと拡大されていく。神の業は漸進的なものであることが解る。使徒行伝はパウロのローマ到着で閉じられるが、今なお終わりの日に至るまで全世界に福音が宣べ伝えられている。**わたしの証人となる** 聖霊の傾注による変革の業が記される。証人は自分の見たもの、知ったものをそのままに語るものである。弟子たちはキリストの行いを見、キリストの言葉を聞いたものたちであるが、聖霊によって初めて福音を宣証できるものとなった。

9 イエスは…天に上げられ、雲に迎えられ、その姿が見えなくなった 復活の主が、弟子たち

に現れ、教え諭された40日間にわたる特別な啓示の期間が終わった。キリストが天に上げられたことから、キリストの復活の体は物質からできた私たちの肉体ではなく、天的な栄光の体である。やがて信仰者も栄化に与るひな形でもある(Ⅱコリント3・18)。雲に迎えられてとあるが、この雲とは私たちの目にする気象学上の雲ではなく、主の栄光(ヘブル語のシェキナー)に伴う雲であった(出エジプト40・34、列王上8・10〜11)。

10 白い衣を着たふたりの人 イースターの朝、イエスが葬られた墓でも、白い衣を着た御使いが現れ、途方に暮れた者たちを教えている(ヨハネ20・12、ルカ24・4)。

11 あなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる イエスがこの地上に再臨されることが明確に述べられている。イエスが最後に弟子たちへ言い残されたことは、8節にあるように聖霊降臨によって力を受けて、全世界にイエスを証していくキリストの証人となることである。イエスの再臨の日までこの命令を忠実に果たしていくことが、個々の信仰者、教会に託された使命である。この使命が果たされることによってイエスの来臨がなされる。弟子たちが天を仰いで立ち尽くしたのではなく、エルサレムに帰って、聖霊がくだることを待ち望み、祈りに専心したことは、神の御心と計画に叶うことであった。

参考図書 The New International Commentary on The New Testament 『The Book of The Acts (Eerdmans)』他

聖書

使徒行伝1・11

タイトル

証人への道

暗唱聖句

ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであらう。

使徒1・8

目標

聖霊を受けて力ある主の証人になろう。

導入

(松浦み)

先月はイエス様の十字架と復活のお話を聞きましたね。覚えていますか？ もう一度思い出してみよう。

父の約束

ルカという医者が書いたイエス・キリストの生涯から、復活の様子を学びましたね。今日からは4ヶ月にわたって使徒行伝を学びます。これはルカによる福音書と同じ著者ルカが、復活の主に出会った弟子たちのその後の様子や、教会がどのように誕生し成長、発展したかを書いたものです。

さて、イエス様は復活なさった後、何度も弟子たちに現れ「わたしはよみがえって生きているのだ」と、確かな証拠を示してくださいましたね。ある時は恐れと不安で部屋に閉じこもっていた弟子たちの所にずっと現れ、「わたしの手や足を見なさい」と十字架の傷跡を見せられました。また、弟子たちと一緒に食事をされ、焼いた魚も食べられました。こんなふうに40日にわたって現れ、弟子たちに神の国のことを語られました。そして、「父

の約束の聖霊が与えられるまでエルサレムから離れないで待つていなさい」と命じられました。ヨハネが水でバプテスマを授け、悔い改めた者の全身を水に浸して、新しい生涯が今より始まるのだということを示したように、「間もなくあなたがたは聖霊によってバプテスマを授けられ、聖霊による新しい生涯が始まるのだ」と語られたのです。

復活のキリストの証人

弟子たちは一緒に集まった時、「イエス様、イスラエル国を復興なさるのはこの時ですか？」と質問しました。当時イスラエルはローマ帝国に支配されていましたから、人々は国の独立を願い期待していたのです。しかし、イエス様はこの質問には答えられずに、「ただ、聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力をうけて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまでわたしの証人となるであらう」とおっしゃいました。先には、「聖霊によってバプテスマを授けられる」と言われ、ここでは「聖霊がくだる時」と言われていますね。バプテスマは死をあらわします。イエス様にあつて今までの私は死に、イエス様のよみがえりによって全く新しい私によみがえるという意味があります。そして、私の体も心も魂もすべてが聖霊によって支配され、聖霊と共に生きることをさしていますね。また、聖霊がくだる時、天よりの力が与えられ、復活の証人として生きていくことができるのです。「力」というギリシャ語の言語の意味はダイナマイトです。皆さんは大きなビルが壊されていく様子を見たことがありませんか？何十階もあるビルもダイナマイトの力によつ

てあつという間に碎けてしまいます。また山にダイナマイトを仕掛けて穴をあけ、トンネルを作ることもあります。このように聖霊がくだる時、弟子たちはもう恐れません。力強くイエス様を証します。まず、「エルサレムで、ユダヤとサマリヤの全土、地の果てまでも」と、言われました。これは身近な人にまず証しすることを意味します。身近な人は自分のことをよく知っているので話しにくいですね。でも、聖霊が力をくださるので大丈夫です。さらに、証しする力は広げられ、やがては地の果てまでも証しするようになりますと約束されました。私たちも聖霊の力を受けてイエス様を証しする者とならせていただきますように。

昇天

このような約束を語られた後、イエス様はオリブ山から、皆の見ていた前で天に上げられ、雲に迎えられてその姿が見えなくなりました。弟子たちはいつまでもいつまでも天を見上げていました。いつの間にか白い衣の御使いが二人、弟子たちのそばに立つて、「イエス様はあなたがたが見たのと同じ有様でまたおいでになります」と告げました。そんなこと信じられないというお友だちもいるでしょう。しかし、イエス様が復活なさった時、「聖書にあるとおり」と言われたことを心に刻んでおいてください。天使の約束の言葉はなんとうれしいことでしょう。ワクワクしますね。

私たちはまた来てくださるイエス様を待ちながら、聖霊の力に満たされて歩みましょう。いつでも、どこでもイエス様が一緒ですから。

♪主よ、献げます♪ (賛美歌21 512)



聖書 使徒1・12～14

テーマ 待望の祈り

序論

(金井)

現代社会は「秒進分歩」と言われるほど急激に変化している。経済社会では激しい競争が展開されており、企業人は深夜まで忙しく働いている。個人主義やサバイバルの危機感は若者や子どもにも浸透している。この時流に呑み込まれて、教会でも、いつも何かをしていないと居づらいような雰囲気が生じていないだろうか。生産的な活動に惹かれて、祈りがおろそかになってはいないだろうか。そこで、祈りの交わりについて再考したい。

一、オリブ山を下って

主イエスは復活された後、40日間たびたび弟子たちにお姿を現された。その間、主イエスが彼らと共に食事をされたという記録が多くある(ルカ24・30、41～43、ヨハネ21・9～12、使徒1・4、10・41)。初代教会の営みの中心は、主の晩餐を記念する聖餐と愛餐の交わりにあったのである(2・42、46、6・1～2、1コリント11・17～34)。その40日の後、イエスは〈オリブ〉山から天に昇られた。そこは〈安息日〉に許されている距離すなわち約1キロメートル以内の地点であった。「イエスは彼らの見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなった」(9)。雲は神の臨在と栄光を象徴している(出エジプト40・34～38)。イエスは父なる神の右、栄光の座に着かれたのである(2・33)。

イエスは手を上げて弟子たちを祝福しながら天に昇られた。雲に包まれていく主イエスのお姿を弟子たちは茫然と見つめていた。すると、「白い衣を着たふたりの人」が彼らに言った、「ガリラヤの人たちよ、なぜ天を仰いで立っているのか。あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」(10～11)。この二人の人は天使だろう。

弟子たちの心は在天の主イエスから離れることではない。だが、彼らは山を下りて都に帰らなければならぬ。使徒とは主から使命を託されて世に遣わされる者である。オリブ山はイエスの祈りの山である。弟子たちはここから遣わされて、人々が暮らす都の中に祈りの家を築くのである。

二、屋上の間に集まって

〈彼らは、市内に行つて、その泊まっていた屋上の間にあがつた〉。当時の家には窓が少なく、屋内は昼間でも暗かった。そのため人々は屋上で多くの時を過ごした。そこに天幕を張ったり、屋根を作ったりして、〈屋上の間〉を設けたのである。原文では〈屋上の間〉に冠詞が付いている。ここはエルサレム教会がよく使った場所だろう。

そこに集まったのは、12使徒(イスカリオテのユダを除く)と、ガリラヤからイエスに従ってきた〈婦人たち〉、〈イエスの母マリヤ、およびイエスの兄弟たち〉であった。イエスの身内の者たちは、かつては彼の宣教に反対していた(マルコ3・21、ヨハネ7・5)。けれども、イエスの十字架と

復活を経て、彼らもイエスの弟子団に加わったのである。

三、共に心を合わせて祈り続けた

そこに集まった〈百二十名ばかりの人々〉は10日間、〈共に、心を合わせて、ひたすら祈をしていた〉。この祈る人たちに聖霊は降られたのである。ルカは、イエスが洗礼を受けられた時、彼が「祈っておられると」、聖霊が彼の上に下られたと記している(ルカ3・21～22)。私たちも、主イエスや初代教会の聖徒たちを模範として、ひたすら祈り待ち望んで、聖霊の満たしを受けたい。

ルカは、宣教活動におけるリトリート(退修・療養)と祈りの重要性を強調している(ルカ4・42、5・16、6・12、9・10、18、28～29、10・21～24、11・1～13、12・31～32、18・1～8、22・17～20、32、39～46)。

私たちは多忙であればなおのこと、み前に静まり、主に再び(レ)取り扱われる(treat)必要がある。共に祈ることが教会の原点であり、原動力である。

結論

私たちの群れは初めから100年以上、聖会や修養会を大切に守ってきた。今も塩屋、磐梯、香登など全国各地で聖会や修養会が開催されている。また、各地域教会は祈禱会を大切に守ってきた。この霊の交わりこそ私たちの群れの生命線である。共に集まり、共に祈り、聖霊に満たされて遣わされ、神の祈りの家である教会を建て上げよう！

研究資料

(井上)

イエス昇天後の聖霊傾注を待ち望む祈りの姿が表されている個所となる。

テキスト

12 オリブという山 オリブ山は中央・南パレスチナを走る山脈の一部をなし、ケデロンの谷を隔てて、エルサレムの東にある。三つ山頂があるが最高峰は⁸¹⁴メートルである。現在は石灰岩がむき出しになっているが、かつてはオリブが全体をおおっていたためにオリブ山と呼ばれている。オリブ山には多くの教会が建てられており、聖跡とされている。**安息日に許されている距離** 安息日（ヘブル語はサバト、英語ではサバス、ユダヤ教では土曜日、キリスト教では復活の主日である日曜日となる）とは即ち週の7日目を指す。安息日には種まきも刈入れも労働もしてはならず（出エジプト34・21）、商売もしてはならない（アモス8・5）。安息日を守る根拠について一つは、神は天地創造の業の時に6日間働かれ、7日目に休まれた。このことによって安息の規定が十戒の第四戒として記されている（出エジプト20・8～11）。もう一つは申命記に奴隷の地エジプトからの救いを覚えて安息日を守ることが示されている（申命記5・12～15）。安息の命令に従って、ユダヤ人はさらに厳密に安息日に歩く距離までも規定した。ヨシユア3・4には、契約の箱と民との間に二千キュビトの距離が置かれたことが記されている。金曜日の日没に契約の箱が止まると、安息日の礼拝のために民は歩いて箱まで行くことが許された。このことから安息日に許されている

る距離とは二千キュビト（90メートル）と考えられている。ユダヤ人史家ヨセフスによれば6スタディア（約千メートル）であるが、いずれにしても1キロメートル前後ということになるであろう。

13 泊まっていた屋上の間 イエスの昇天後ベンテコステまでの10日間弟子たちが、どこに集って祈っていたかということは議論されてきた。マルコと呼ばれたヨハネの母マリヤの家は、使徒行伝12章でペテロがヘロデ・アグリッパに捕えられた時に、信者が集って徹夜の祈りがささげられていた。ベンテコステ前の祈りの場合は、裕福で広さのあったマリヤの家であったことが想像される。屋上は仮庵の祭りの時には仮庵が作られた場所でもあった（ネヘミヤ8・16）。涼むための場所が設けられたり（士師記3・20）、客室が増築されたり（列王下4・10）した。本個所からも解るように祈りの場ともされていた。**その人たち** 弟子たちの名前が列挙されている。同一の著者であるルカ6・12～16での配列とは若干異なっているが、双方ともペテロが最初に記され、誕生前後の教会の指導者がペテロであったことを物語っている。また、当然のことながら本個所ではイエスを裏切ったイスカリオテのユダの名は外されている。

14 イエスの母マリヤ イエスがゴルゴダの丘で十字架に付けられた時、そばに立ち続けたことが記されているが、イエスの復活・昇天後、聖霊を待ち望む祈りの中にその姿が記されている。誕生前後の教会にあつて大切な働きを担ったと思われる。母マリヤについて聖書での言及はここまでである。**イエスの兄弟たち** マタイではヤコブ、ヨセフ、

シモン、ユダと記され（マタイ13・55）、マルコではヨセフがヨセと記されている（マルコ6・3）。また、姉妹たちも存在した。イエスが神の働きに立たれた時、家族は理解どころか反対し、力づくで取り押さえようとした（マルコ3・21）。イエスの十字架と復活、昇天という救いの業が進む中で、家族にも信仰が与えられていった。イエスの兄弟ヤコブはペテロ後のエルサレム教会の指導者となり、パウロは「柱として重んじられている」一人の中にヤコブを数えている（ガラテヤ2・9）。伝承によれば禁欲的な生活を終生続け、激しい祈りのためにヤコブのひざはラクダの足のようになつていたと言われている。ヤコブの手紙の著者はイエスの兄弟ヤコブである。ユダの手紙の著者はイエスの兄弟のユダである。私たちも家族から理解されず反対を受けることもある。イエスも同じ痛みを経験されたことは大きな励みであり、イエスが去った後に信仰を持った家族の姿は、神が家族の救いを成し遂げてくださるという希望を持たせるものである。**心を合わせて** 使徒行伝中10回用いられている。多くは祈りの場においてである。信仰者が心一つに祈る祈りは力あるものである。**ひたすら祈をしていた** 弟子たちにとって、ここまで熱心に、ひたむきに祈った経験はこれまでになかったことであろう。彼らの祈りによって神様の業は起こされていった。

参考図書 The New International Commentary on The New Testament
『The Book of The Acts』(Eerdmans) 他

聖書 使徒行伝1・12～14
 タイトル 待望の祈り
 暗唱聖句 心を合わせて、ひたすら祈をしていた。
 使徒1・14
 目標 聖霊を求めて祈りつづけよう。

導入

(松浦み)

イエス様がオリブ山から天にお帰りになるのを見とどけた弟子たちはその後どうしたのでしょうか？

山を下って

弟子たちは山を下ってエルサレムに帰りました。山を下る弟子たちは、きつと口々にイエス様の天に上っていかれる様子を話しながら、「イエス様が約束されたように祈って待っていようね」と言い合ったことでしょう。彼らは非常な喜びをもって神の宮に行き、神様をほめたたえ、礼拝し感謝をささげました。かつては、イエス様を裏切つて、恐れて逃げ出した弟子たちでしたが、40日間にわたる数々の出来事を通して勇気づけられ、「主は生きておられる！ また再び来てくださる！」とエルサレムの町に帰って行ったのです。

屋上の間に集まって

弟子たちは、イエス様の最後のご命令を心に深く受け止め、エルサレムを離れないで「聖霊の力を受けるまでは」と、心を合わせてひたすらお祈りをしていました。そこに集まっていた人々は、イエス様を裏切つて死んでしまったイスカリオテ

のユダを除いた11人弟子たちでした。弟子たちの名前を言ってみましょう。ペテロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、ピリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルパヨの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダの11弟子たちでした。それからイエスを信じる婦人たち、イエスの母マリヤもいました。また、イエス様がこの世にいらつしやる間は信じなかったイエスの兄弟たちも集まって来ました。その数は120名ほどだったと記されています。これらの人たちは熱心に約束の聖霊を待ち望んで祈りました。

心を合わせて

120名の方が心を合わせて祈るということはたやすいことではありませんね。皆さんは「30人31足の徒競走を知っていますか？ 年の初め頃に小学生の全国大会の様子がテレビで放映されていたので、見た人もいるかもしれませんね。二人三脚を30人で行う徒競走です。二人の人が真ん中の足をくくつて一緒に走ることも大変なことですから、30人31足となつては至難の業です。二人が一人のように、30人が一人のようにならなければ走れません。その秘訣は心を合わせて一つになることです。

屋上の間に集まってきた120人はどうだったのでしょうか。多分、祈りを始めたころは「間もなく聖霊がくだるでしょう」と、イエス様が言われていたので、それこそすぐにでも聖霊を受けると思っていたことでしょう。しかし、2日、3日、4日と日がたつても何も得ることがありません。120人の心にはいろいろな思いが駆け巡ったことでしょう。

う。約束を疑ったり、恐れ心が起こったり、あきらめたりと、皆の心は一つとなるどころか互いに非難しあったり、怒ったり、「こんなことしてたつてダメだよ、意味のないことだね」とすねたり、ちりぢりばらばらの状態だったことでしょう。しかし、120人の心が溶かされ、一人一人の自己中心な思いが取り除かれ、ただひたすらイエス様のお言葉を信じて「間もなく聖霊が降ること」だけを待ち望んで祈ることができるようになりました。そして、7日、8日、9日と日が経っていったのです。もう彼らの心は動かされることはありませんでした。なん日経とうが、ただひたすら祈り続けることができました。彼らの心がきよめられ、聖霊を受けるにふさわしいところまで整えられた時、約束の聖霊が与えられたのです。

まとめ

私たちもイエス様の十字架を信じ、心をきよめていただき、聖霊を待ち望みましょう。「どうぞ、私の心に住んでください。来てください」と祈りましょう。最後にイエス様が教えてくださった祈りが叶えられる秘訣のみ言葉を開きましょう。「また、よく言っておく。もしあなたがたのうちのふたりが、どんな願い事についても地上で心を合わせて下さるであろう。ふたりまたは三人が、わたしの名によつて集まっている所には、わたしもその中にいるのである」(マタイ18・19～20)。

♪祈つてごらんよ、わかるから♪

(新聖歌48)



聖書 使徒2・1～13

テーマ 五旬節 ペンテコステ

序論

(金井)

〈五旬節〉(ペンテコステ)は過越から数えて50日目に行われる祭りである。紀元30年のこの日に聖霊が降臨されてキリスト教会は誕生した。使徒行伝2章から教会の本質について学びたい。

一、神に召された者の集まり

ルカは、キリスト教会が誕生する過程において、イエスの弟子たちが一緒に集まっていたことを繰り返し記して、強調している(1・6、14～15、2・1)。和訳聖書で「教会」と訳されている原語はギリシア語の「エクレシア」である。これは七十人訳聖書(旧約聖書のギリシア語訳)において、イスラエルの「集会」や「会衆」を意味するヘブル語「カーハール」の訳語として用いられた語である。すなわち、キリスト教会はイスラエルに代わって選ばれた新しい神の契約の民なのである。「教会」とは本来、建物でも法人組織でもない。「教会」とはイエスをキリストと信じて告白する「人々の集まり」である(マタイ16・18、18・17)。聖書は、孤高を保つキリスト者というものを教えていない。キリスト者＝教会は共に生きることに召されている存在である。(みんなの者が一緒に集まっている)ところに〈聖霊〉が降臨されて、教会は誕生したのである。

教会が人の集まりである以上、問題が皆無ということは無だろう。しかし、問題があるからと

いつて教会を離れ、独り静かに信仰生活を守ろうなどと考えるてはならない。私たちキリスト者は、そのキリスト者としての召しのゆえに、どんな理由があるにせよ、決して集会を軽視してはならないのである(ヘブル10・25)。

地方の教会や開拓の教会など、人数が少なくても、キリスト者が共に集まるところに主は臨在され、豊かな恵みを注がれる(マタイ18・19～20)。病者や高齢者の訪問・交わりも大切にしたい。

二、礼拝共同体

「交わり」(コイノニア)は教会の本質である。ただし、教会はサークルや読書会とは違う。ただ人が集まって聖書を学ばよというものではない。教会を真に教会としているものは、キリスト者の集まりの中心に臨在される〈聖霊〉である。イエスの弟子たちは10日間ひたすら神に祈り、約束の〈聖霊〉を待ち望んだ。その結果、〈五旬節の日〉に〈突然、激しい風が吹いてきたような音が天から起つてきて、一同がすわっていた家いっばいに響きわたった。また、舌のようなものが、炎のように分れて現れ、ひとりびとりの上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語り出した〉のである。

ここでは〈聖霊〉の働きが三つのものに象徴されている。(風)は人を生かす神の息吹である(創世記2・7、エゼキエル37・9、ヨハネ3・8)。(炎)は聖なる神の臨在を表す(出エジプト3・2、13・21、19・18)。聖霊の火によって人はきよ

められる(ルカ3・16～17)。(舌)は全世界の人々に向かって発せられる神の言葉を表す。

「聖霊の交わり」(Ⅱコリント13・13)が無ければ、どんなに多くの人が集まっても、それは教会ではない。「わたしたちの交わりとは、父ならびに御子イエス・キリストとの交わりのことである」(Ⅰヨハネ1・3)。三位一体の神との霊的な交わり、すなわち礼拝こそ教会の中心的な営みである。

三、宣教共同体

この時、ヘブライスト(ヘブル語とアラム語を主として用いるパレスチナ地方出身のユダヤ人)であるガリラヤ人たちが、いろいろな外国語で(神の大きな働き)を語り出した。世界の各地から祭りに集まっていた離散のユダヤ人たち(ディアスポラ)はこれを聞いて非常に驚いた。これは聖霊による宣教の働きが、民族・国家・言語・文化などあらゆる障壁を越えて、全世界に広がっていくことのしるしである。「聖霊がくだる時」、私たちは「力を受けて」、「地のはてまで」キリストの(証人)となるのである(1・8)。

教会の中心的な使命は宣教である。

結論

〈聖霊〉は今も私たちの内に働いて、教会を導いておられる。教会は地上にありながら、〈天から〉降った〈聖霊〉の宿る神の国である。教会は地上において天国を代表する公的機関なのである。神に召された私たちは共に神を礼拝し、聖霊に満たされて、広く人々に福音を伝えていこう。

研究資料

(井上)

聖霊傾注を待ち望む祈りの時が満ちて、ペンテコステの日に聖霊がくだった。キリスト教会では聖霊降臨日となる。救いの歴史において聖霊の時代が到来した大きな節目となる個所である。

テキスト

1 五旬節の日 五旬節（ギリシャ語の表音がペンテコステ）は七週の祭り（レビ23・15）と呼ばれる小麦を収穫する初夏の祭日であり、より古くは刈入れの祭りと呼ばれる収穫祭であった。

2 激しい風が吹いてきたような音 この時響いた音は弟子たちのみならず、周囲の他の人々にも聞こえたようである（使徒行伝2・6「この物音に」。風は神の霊の象徴である。エゼキエル37章の枯れた骨の谷の個所でも、息が四方から吹いて枯れた骨が連なり、生きる者となった（エゼキエル37・9）。ペンテコステの日に吹いた風の詳細は解らないが、いずれにしても神の霊は偉大な力をもって臨んだのである。

3 舌のようなものが、炎のように分かれて現れ ペンテコステの日の聖霊傾注は、特別なものとして風の音として聞こえ、炎のように見えるものであった。イエスによるバプテスマは聖霊と火によるものであると洗礼者ヨハネが語ったとおりである（ルカ3・16）。火は神の聖さと潔めの業を現している。舌（グロッサ）はまた、言葉とも訳される。イエスは宣敎命令の中で「新しい言葉を語り」（マルコ16・17）と言われた。「言葉」は「舌」と同じ用語である。聖霊がくだることによって弟子

たちは、今まで語れなかったイエスの福音を、新しく語り出したのである。

4 一同は聖霊に満たされ ヨエル2・28で語られている聖霊傾注の預言は、「わたしはわが霊をすべての肉なる者に注ぐ」であった。ヨエルに語られた預言の通りに聖霊は、傾注を待ち望んだすべての者にくだった。「聖霊がくだる」という表現は使徒行伝中4回のみでありペンテコステの特異性、一回性を表すが（5/17研究資料参照）、「聖霊に満たされる」はペンテコステを含め9回の出来事に用いられている。ペンテコステの出来事は1回限りであったが、以後聖霊に満たされることは、教会の歩みの中で、個人の信仰の中で起こされていくことである。**御霊が語らせるまに、いろいろの他国の言葉で語り出した** 周囲に集っていた外国の出身者が理解したように、この時の言葉は明らかに外国語を意味している。伝達される知性による言葉（1コリント14・19）であった。

6 彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話している 9/11節にペンテコステの日にエルサレムに集っていた者たちの出身地のリストが出てくる。パルテヤ、メジヤ、エラムとメソポタミヤはユーフラテス川の東である。アッシリヤからパルシヤ帝国に至る旧約の歴史の流れでユダヤ人は移住、捕囚を経験し、バビロンを始めメソポタミヤに定住したのも多かった。ユダヤは周辺地域も含めた母国である。カパドキヤ、ポントとアジア、フルギヤとパンフリヤは小アジアとなるが、ユダヤ人共同体の多かった地域でもある。新約以前の中間期のギリシヤ支配が影響を及ぼしている。エジプトとリ

ビヤはユダヤ人が多数住む地域であった。ほぼ同時期にエジプトのアレキサンドリヤには百万人のユダヤ人人口があったと自身もアレキサンドリヤの住民であったフィロンは記している。一世紀には四万人から六万人のユダヤ人人口のあったローマ、地中海のクレテ島、アラビヤ半島の人々、広域に及ぶユダヤ教改宗者も含まれ、集まっていた者たちの出身地は、聖書世界の全域に及んでいる。

7 いま話しているこの人たちは、皆ガラリヤ人ではないか イエスの弟子たちはガラリヤの漁師であったペテロを始めとして、専門的な教育は受けていない者たちであった。指導者層から「無学な、ただの人たち」（使徒行伝4・13）と呼ばれた素養のない弟子たちが、遠く外国の言葉を語ることができたということは、実際に聞いているものでさえ信じがたい驚異であった。**驚き怪しんで**（7節）、**驚き惑って**（12節）という強い表現が繰り返されている。

13 あの人たちは新しい酒で酔っているのだ 天的な働きによってなされた業を、自分たちの知恵で理解できないからといって、人々は世的な冒流を浴びせさせた。**だれもかれも聞いてあっけに取られた**（6節）という聖霊降臨に伴った外国語による宣敎の出来事は、聖霊がくだったという神の業が、この世の常識や経験でははかれないほどの大きなものであったということを表している。

参考図書

The New International Commentary on The New Testament "The Book of The Acts" (Eerdmans)『論集・聖霊』（ホーリネス教団）

聖書
タイトル
暗唱聖句使徒行伝2・13
五旬節（ペンテコステ）

一同は聖霊に満たされ、御霊が語らせるままに、いろいろの他国の言葉で語りだした。

目 標

聖霊降臨を記念し、聖霊に満たされよう。

使徒2・4

導入

（松浦み）

今日は、教会がエルサレムの町に初めて誕生したことを祝うとても大切な記念日です。この初めの教会は、今では全世界に増え広がり、地の果てまでイエス様の福音が宣べ伝えられ、私たちのところまで届いています。なんとうれしいことでしょう。心からこの日を感謝したいですね。

先週は120人の人が約束を祈り待ち望んだことを学びましたが、どのように祈りが答えられたのでしょうか。

聖霊降臨の約束と祈り

イエス様は十字架にかかってよみがえられた後40日の間、何度も弟子たちに現れ「もうすぐ、聖霊が授けられるから、エルサレムで待つていなさい」とおっしゃいました。また、「聖霊がくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、地のはてまでわたしの証人となります」と約束されました。やがて、イエス様は語り終えられると、弟子たちの見ている前で天に上げられていきました。弟子たちはエルサレム

に戻ってお言葉を信じて熱心にお祈りしました。イエス様が「エルサレムを離れないで、父の約束を待つていなさい」と、お命じになったからです。

聖霊が降る

弟子たちが祈り始めて1日、2日、3日、4日と日が経っていききました。とうとう10日目を迎えました。その日は七週の祭りの日でエルサレムにはさまざまな国から人々が祝いのために集まっていました。七週の祭りは小麦の初穂を捧げる祭りで、また、エジプトを脱出したイスラエルの先祖がシナイ山で律法を授けられたことを記念する祭りでもありました。五旬節の日とは、50日目ということでギリシャ語ではペンテコステといいます。「今日はイエス様が復活して50日目だ、もしかしてこの祭りこそ約束の日かもしれない！」弟子たちの心にひそかにそんな思いがよぎったかもしれない。朝の9時のことです。120人の者が一同に集まり祈っていると、突然ドゴーン！ピュー、ヒューッと、天から大風が吹いてぶつかってくるような激しい音が家中に響き渡りました。弟子たちは何事が起こったのかびっくりして声も出ません。「見ろ！天から火が降って来たぞ！」舌のような形をしたものが、ヒュン、ヒュンと炎のように分かれて一人一人の上にとどまりました。「あなたがたは聖霊のバプテスマを受けるであろう」と約束されたように今聖霊が降ったのです。すると一同は急に、生き生きとした輝いた顔になって聖霊に満たされ、聖霊が語らせるままに、外国の言葉を話し出しました。

驚く人々

エルサレムに集まった人々は驚くばかりです（パウロの伝道旅行の地図を用意してお話くださるとどんなに遠くの地域から人々が集まっていたかが良く理解できます）。聖霊を受けた弟子たちは、いろいろの言葉で神様の素晴らしさを語りだしました。何事が起きたのだと驚いて集まってきた人々は「これはいったいどういうことだろう」「この人たちはみなガリラヤ人ではないか」「わたしの国の言葉を話しているとは……」中にはあざ笑って「あの人たちは、新しい酒で、朝から酔っ払っているに違いない」という人までいました。そこでペテロが立ち上がり声を張り上げて、「皆さん、どうか聞いてください。私たちは決して酔っているのではありません」と言って大勢の人の前で、聖霊に満たされて堂々とイエス・キリストのことを話したのです。ペテロはかつて、イエス様が捕らえられた時には、逃げ出したばかりでなく、三度も「イエスなんて知らない」と否んだことがあるのです。そんなペテロが、すっかり姿変わりして力強く説教を始めることができたのです。

まとめ

日本に最初にプロテスタント宣教師がきたのは一八五九年です。二〇〇九年の今年はちょうどプロテスタント宣教150年目にあたります。宣教師のひとりヘボン師はローマ字を作って私たちの日々の生活に今でも大きな影響を与えています。この記念すべき年に小さな私たちですが、聖霊に満たされて主の証人にならせていただき、勇気をもって語ることができるように祈りましょう。

♪雄々しくあれ♪

（新聖歌486）



聖書 Iテサロニケ4・13～18

テーマ 復活の希望

序論

(加藤)

テサロニケの教会に書き送ったパウロの手紙の冒頭の挨拶は、教会の人々への称賛に満ちていた。そこで分かることは、テサロニケの聖徒たちが、「多くの患難」にもかかわらず、「キリストに対する望みの忍耐」をもって、その地域の「信者全体の模範となった」ということである(1・3、6～7)。これほどにも、テサロニケの人々の信仰を支える力となったものは、いったい何だったのだろうか。一つにそれは、キリストの再臨に対する信仰であった。実際、キリストの再臨を熱く待ち望むテサロニケの聖徒たちは、偶像を離れ、自らをきよく保ち、ひたすら神に仕えたのである(1・9)。しかし彼らには、一つの憂いがあった。

一、テサロニケの人々の心配と憂い

テサロニケの人々は、主の再臨を確信し、待ち望んでいたけれども、主の来臨前に死んだ人々については、まだよく理解していなかった。

テサロニケの聖徒たちは、自分たちの生きている間に再臨があることを期待していた。パウロ自身も「生きながらえて主の来臨の時まで残るわたしたち」(15)と記しているように、当時の人々はキリストの再臨が、早急に実現するものと考えていた。

しかしそこで彼らの内に、次のような疑問が生じた。「それでは、再臨を待たずして、先に死んだ

者たちはどうなるのか。彼らは私たちと共に、再臨の主の前に立つことができないのではないか」。教会の人々は、そのように、先に死んだ人々のことを心配し、憂いていた。

二、パウロの説明

そこでパウロは、彼らが無知のゆえにいたずらに悲しむことがないように、復活の真理を、丁寧に順序立てて教えた。

〈兄弟たちよ。眠っている人々については、無知でいてもらいたくない。望みを持たない外の人々のように、あなたがたが悲しむことのないためである〉。

パウロは、ここで二つのことを述べている。

第一は、先に死んだ人々、即ち眠っている人々がどうなるかということである。(イエスが死んで復活されたからには、同様に神はイエスにあつて眠っている人々をも、イエスと一緒に導きだして下さるであろう)。

キリストは眠っている者の初穂として復活された(1コリント15・20～28)。それ故に先に死んだ人々も、イエスに続いて復活するのである。神は、必ずイエスにあつて眠っている人々をよみがえらせ、再臨の主の前に立たせてくださる。これがパウロの、先に死んだ人々についての、明確な解答であった。

第二は、再臨の時に起こる出来事の順序である。パウロはまず、先に死んだ者たちが、生きている者たちに先立つことを明らかにする。

〈生きながらえて主の来臨の時まで残るわたし

たちが、眠った人々より先になることは、決してないであろう〉。

そして、キリストの再臨をめぐることは、さらに順序だった説明がなされる。

まず主ご自身が、天から下って来られる。それから、キリストにあつて死んだ人々が、最初によりみがえり、最後に生き残っている人々も、彼らと共に引き上げられる。そして彼らは空中で主に会い、いつも主と共にいる者となるのである(4・16～17)。

三、復活の希望

このように、パウロは再臨のヴィジョンを明らかにした。それは、生きて再臨を待ち望む者たちにとつても、すでにキリストを信じて死んだ者たちに対しても希望に満ちたメッセージであった。

故にパウロは、テサロニケの教会の人々が、この復活と再臨の真理に堅く立って、互いに慰め合い、励まし合うことを促した。

〈だから、あなたがたは、これらの言葉をもって互に慰め合いなさい〉。

復活の真理を正しく理解し、再臨を待ち望むことは、私たちにとって大いなる希望である。

結論

キリストの再臨は必ず来る。その時、キリストを信じてバプテスマに預かった聖徒は、すでに死んだ者も、生き残っている者も、終わりの時に、主と共に生きる。この真理に堅く立って、希望をもって共に歩もう。

研究資料

(木村)

テサロニケ教会はパウロから再臨の希望について聞かされていたが、教会には再臨を待たずして召天した信者がいた。彼らは滅びてしまったのか、再臨の恵みにあずかれないのか等、再臨についての十分正確な知識がなく悲観していた。そこでパウロはそのことを教え励ます必要に迫られた。

テキスト

13 眠っている人々 死人の婉曲表現(ヨハネ11・11)。救われた者にとって、死は復活のいのちへと目覚める一時的な眠りに過ぎないから、**眠っている**とは単なる婉曲表現ではなく、事実眠っているに過ぎないのである。永遠に眠り続けるのではなく、再臨の日に復活し、主と共に永遠に生き、天国で再会する望みを抱いて仮眠しているのである。それゆえ、S教会墓地の石碑には「仮眠の地」と刻まれている。**兄弟たちよ…無知でいてもらいたくない** 重大なことや新しいことを述べるときのパウロの決まり文句(ローマ1・13、11・25、Iコリント10・1、12・1、IIコリント1・8)。**望みを持たない外の人々** 未信者全般を指す表現で、まさに「希望もなく神もない」人々である(エペソ2・12)。

14 新改訳「私たちはイエスが死んで復活されたことを信じています。それならば、神はまたそのように、イエスにあつて眠った人々をイエスといつしよに連れて来られるはずです」のほうが適訳。イエスによって死は眠りに変革された。生まれながらの人にとっては、死は依然として人生最大の敵であるが、キリスト者にとっては復活までの一時的な眠りであつて、全く恐れがない(Iコリ

ト15・54〜57)。それは、**イエスが死んで復活された**という神による歴史的事実に基づく希望の確信である。新約聖書中、キリスト者の死については、「死ぬ」ではなく「眠る」と表現されている。しかしイエスの死については、「眠った」という表現はどこにもなく、あるのは**死んで**という表現である(Iコリント15・20)。イエスの死は、幻想や演技でもなく、失神や仮死でもない。完全に死なれたのである(マルコ15・44〜46)。

15 主の言葉によって言うが マタイ24・31が内容的に最も近いが、聖書には記録されなかったイエスの言葉を指しているのかもしれない(ヨハネ20・30、21・25)。イエスのどの言葉というよりも、再臨に関するイエスの教えの要点を指しているのかもしれない。あるいはパウロに直接啓示があつたのかもしれない(Iコリント2・10、IIコリント12・1〜10他)。**生きながらえて…残るわたしたち** パウロは、自分が再臨まで生きていることを言おうとしたのではなく、今は死んでいないことを言ったに過ぎない。

16〜18 主ご自身が 原文では主語が非常に強調されている。それは、どのように再臨されるかよりも、他でもない**主ご自身が**再臨されることのほうがはるかに重要だからである。**天使のかしら**キリスト降誕のときも(ルカ2・8〜14)、そして再臨のときも天使が先導する。**合図の声**(ケリユースマ) 新改訳は「号令」。船長が漕ぎ手に、軍隊長が軍人に、狩人が猟犬に、御者が馬に叫ぶ命令、闘いの声を意味する語。キリストは征服者として再臨される。**神のラッパ** 旧約時代には会衆を集めるとき(レビ25・9)、戦争のとき(列王下11・14)、新

年の祭りのとき(レビ23・24)、ラッパが吹かれたが、再臨のときには**神のラッパ**が吹かれ、世々の聖徒が集められる(マタイ24・31、Iコリント15・52)。**雲** 主の顕現の象徴(出エジプト19・16、列王上8・10〜11)。キリストは雲に乗って再臨される(ダニエル7・13、マタイ24・30、黙示録1・7)。その時、**キリストにあつて死んだ人々が、まず最初によみがえ**る。彼らの魂は今パラダイスで安息しており、肉体は土のちりに帰っている。キリストが再臨されると、土のちりに帰っていた肉体が瞬間的に栄光のからだに変えられ、パラダイスで安息している魂と結びつく(Iコリント15・52、IIコリント5・1〜10、ピリピ3・21、Iヨハネ3・2)。これこそテサロニケ教会の悲観的な疑問に対する答えである。次に、再臨時に**生き残っている**キリスト者たちは、一瞬にして栄光のからだに変えられ、**彼らと共に雲に包まれて引き上げられる**。彼らと共に再臨は、キリストとの再会の時であるとともに、先に召された兄弟姉妹との再会の時でもある。**会い**(アバンテース) 王や高官の巡回訪問を公式に歓迎するときの語(マタイ25・6、使徒28・15)。**いつも主と共にいる** ことこそ、この個所におけるクライマックスであり、だからこそ**互に慰め合う**ことができるのである(5・11)。

参考文献 宮村武夫「テサロニケ人への手紙」『新聖書注解 新約3』(いのちのことば社)・C.S.Keener『The IVP Bible Background Commentary: New Testaments』(IVP)・L.Morris『1&2Thessalonians』Tyndale New Testament Commentary, Vol.13 (IVP) 他

7日 礼拝メッセージ例

聖書	Ⅰテサロニケ4・13～18
タイトル	復活の希望
暗唱聖句	空中で主に会い、こうして、いつも主と共にいるであろう。 Ⅰテサロニケ4・17
目標	信じる者の復活の約束を受けよう。

導入

(木村純)

「希望」という言葉は、すてきな言葉ですね。どんなことでも希望があると、心が明るくなり、力が湧いてきます。逆に希望を失ってしまうと、心もおれてしまい、やる気も元気もなくなってしまう。皆さんにはどんな希望がありますか。神様は私たちにいつまでも続く素晴らしい希望を与えてくださいました。それは何だと思いますか。

キリストの復活

十字架にかかられたイエス様は、お墓に葬られましたが、罪と死を滅ぼして、3日目に復活されました。イエス様は、新しいからだをもって復活され、十二弟子に現れ、500人以上の兄弟たちに同時に現れました。それは、ご自分が本当に甦（よみがえ）られたことを信じさせるためでした。その後イエス様は、オリブ山において弟子たちが見ている前で天に上げられ、雲に迎えられて、その姿が見えなくなりました。弟子たちが天を見つめていると、御使いが現れてこう言いました。「あなたがたを離れて天に上げられたこのイエスは、天に上って行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになるであろう」。今日の聖書の個所にも、

その時の様子が書かれています。「天使のかしらの声と、神のラッパの鳴り響くうちに、合図の声でイエス様が天から下って来られる」とあります。イエス様は、イエス様を信じた人々を迎えるために、空中に下って来られます。その時、何が起るのでしょうか。

眠った人々の復活

パウロがこの手紙を書き送ったテサロニケ教会の人々は、パウロからキリストの再臨の希望について聞いていました。でも、再臨前にすでに亡くなった人々がいたので、その人々は再臨の恵みにあずかれないのではないかと考えて、希望を失い悲しみに沈んでいました。それに対してパウロは、イエス様が再臨されるときには、イエス様を信じて先に天に召された人々がまず最初に甦（よみがえ）るのだと答えました。その人々の肉体は、土のうちに帰っていますが、魂は今パラダイスというところでイエス様と共に安息しています。イエス様が再臨されるときに、土のうちに帰っていた肉体が一瞬にして栄光のからだに変えられ、パラダイスで眠っている魂と結びついて甦（よみがえ）るのです。イエス様が死を打ち破って甦（よみがえ）られたように、イエス様を信じる人々の内にも同じ復活の命が与えられているからです。アメリカのクリスチャン専用の墓地に、80過ぎで亡くなられた一人のおばあちゃんのお墓がありました。その墓石には、次のような言葉が刻まれていました。「I am waiting.」。「私は待っています」。イエス様が再臨されるときに、自分も復活することができるといっておばあちゃんの信仰と希望を、その言葉は表しているのです。

生き残っている者の復活

次に、イエス様が再臨されるときに、この地上に残っているクリスチャンたちはどうなるのでしょうか。その人々は一瞬にして栄光のからだに変えられ、雲の中に一挙に引き上げられ、空中でイエス様とお会いするのです。このようにして、いつまでもイエス様と共にいることができるのです。実は、旧約聖書の中にもそのような人々がいました。それはエノクとエリヤです。エノクは300年神様と共に歩み、生きたまま天に移されました。エリヤは火の車に乗ったまま、竜巻によって天へと上って行きました。それは、イエス様が再臨されるときに、生き残っているクリスチャンたちに、やがて起こるべきことを、あらかじめ示した出来事だったのです。そしてまたその時は、イエス様とお会いするだけでなく、先に天に召された家族やお友だち、教会の方々とも再び会うことができます。この地上でのお別れはとも寂しく、悲しいことですが、天において再び会うことができるとしたら、その希望に支えられて、天国を待ち望みながら生きていくことができますね。パウロはこの約束を信じて、悲しみに沈むことなく、互いに慰め合いなさいとテサロニケ教会の人々に書き送りました。

まとめ

イエス様を信じる者に与えられている復活の希望は、何とすばらしいことでしょう。私たちも神様のこの約束を信じて、その希望に生きる者としていたしましょう。

♪神さまのみにく(ふく)いんこどもさんびか33)



聖書 マタイ6・25〜34 テーマ 野の花

序論

(加藤)

本日は花の日である。花の日の由来はおおよそ150年前に、アメリカのC・H・レオナルドという牧師が、子どもたちの祝福のために、六月の第二日曜日に特別な礼拝を持ったことが始まりと言われている。後年人々は、この日に花を持ち寄って教会に飾るようになり、礼拝後は子どもたちに花を持たせて、病院などを慰問したそうである。

このような行いは、子どもたちに感謝と奉仕を学ばせるためになされたものと言われているが、私たちも神様が与えてくださっている恵みに心をとめて、感謝をもって主に仕える者になりたい。そこで今日は、主イエスのお語りくださる空の鳥や野の花の教えから学びたい。

一、思い煩うな

今日の個所で主イエスは群衆に、〈何を食べようか、何を飲もうかと、自分の命のことで思いわずらい、何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか〉とおっしゃった(25)。

実際、食物や着物といった生活のことで心配しながら毎日を過ごすこと、それは当時、主イエスを取り囲んだ群衆の現実であつたらう。

もちろん主イエスも、そのことをよくご存じであり、彼らの生活を軽んじたわけではなかった。その証拠に、「わたしたちの日」この食物を、きよ

うもお与えください」(6・11)とは、主イエスが教えられた祈りである。

しかしもし、人が食べること、飲むこと、着ることといった地上のことにのみ、心奪われ、真により頼むべき神を忘れてしまい、いたずらに思い煩ってしまうならば、それは神のみ心ではない。主イエスは、彼らがそのことを良く分かるように、十分な配慮をもって教えられたのであつた。

二、空の鳥と野の花

主イエスが、〈思いわずらうな〉と言うことのたれに取り上げた話題は絶妙である。群衆にとつてそれは身近で、非常に分かりやすい題材であつた。第一に空の鳥である。

空の鳥は播くことも、刈りいれることも、倉に取り入れることもしない。けれども天の父なる神は鳥たちを養つてくださる。ましてや、〈あなたがた〉人間は、鳥たちよりもはるかに優れた者ではないか(26)。だから何を食べるか思い煩うな。

これが主イエスの論法である。主イエスのお言葉に促されて、自然に与えられ餌を食し、自由に羽ばたく鳥の姿を見た人々は、自分に与えられた神様の恵みに、心から納得したことであらう。

第二に、野の花である。

これも先の空の鳥の話と同じ論法である。

野の花は働きもせず、紡ぎもしない。しかし栄華をきわめたソロモンでさえも、この花一つほどにも着飾つてはいなかった。野の草でさえこのように神が装つてくださるならば、人間にそれ以上良くしてくだらないことがあろうか(28〜31)。

だから何を着ようかと思ひ煩うな。

あざやかなガリラヤの草原に咲く花を目にしつゝ主イエスのお言葉に触れた人々は、神のなさる偉大なみわざに心を打たれたことだらう。

この二つの話の要点は、鳥を養い、花を装われる全能の神は、私たち人間のすべての必要をご存じであるということである(32)。主なる神は、契約の民を養い、必要のすべてを必ず満たしてくださる。これが思い煩いから解放されるようにと、主が私たちに示してくださった真理である。

三、思い煩いに代えて

主イエスはこれらのことを言われた後、思い煩いに代えて、真に求めるべきものを示された。

〈まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであらう〉。

ここで主イエスが明確にされたのは、私たちが求めるべき優先順位である。私たちが第一にすることは、神のみ心に従つて生きることである。神は、私たちが神から与えられたものに感謝し、心から喜んで神に仕えることを望んでおられる。そして私たちがそのように生きるならば、私たちの一切の必要をご存じの神は、すべてを添えて与えてくださるのである。

結論

主なる神は、野の花を美しく装う以上に、私たちを満たしてくださるお方である。思う煩うことなく、心から主に信頼し、お仕えしていこう。

研究資料

(木村)

第6章の前半1～18節は、「隠れた事を見ておられる」神の前にどのように施し、祈り、断食することについて教え、後半19～34節は、目に見えない神にどのように信頼するかについて教える。

テキスト

25 それだから 前の19～24節を受けている。「神と富とに兼ね仕え」ようとしても不可能であるばかりか、やがて必ず富に支配されるようになり、その結果、思いわずらいが生じることになる。であるならば、富に仕えるという愚かなことなどやめよ、という意味でのそれだから。命(プシケ―) 魂の意。思いわずらうな(メリムナオ―) 心が幾つにも引き裂かれて乱れる、の意。これは、将来に対する軽視、無計画、怠慢を勧めているわけでは決してない。神への信頼に土台しない必要以上の心配を戒めているのである。「無くてならぬ」ことに心を傾けないで、物質的なことに心が引き裂かれて乱れる。これが思いわずらいの正体である(ルカ10・38～42)。思いわずらいが不要である第一の根拠は、命とからだは食物と着物よりはるかに重要で、神が命とからだを与えられた以上は、それらの維持に必要な食物と着物も必ず与えてくださるということである。

26 第二の根拠は、空の鳥を養っておられる神が、彼ら(空の鳥)よりも、はるかにすぐれた人間を顧みられないはずがないということである。「神の永遠の力と神性とは…被造物において知られて」いる(ローマ1・20)。思いわずらうのは、自然界から何も学び取っていない証拠である。あ

なたがたは 原文では強調されている。

27 寿命(ヘーリキア) 身長(ルカ19・3「背」、年齢、寿命、の意。わずかも 直訳は「一ペーキュス」で、一キュビト。肘から中指の先までの長さで約45cmのこと。第三の根拠は、どんなに思いわずらっても、自分の寿命をわずかも延ばすことができ ないということである。むしろ思いわずらいは寿命を縮める。寿命は神の御手の中にあること(ルカ12・13～21)、神に信頼する以外ない。

28～30 第四の根拠は、栄華をきわめた時のソロモン 以上に(列王上10・4～5)、きょうは生えていて、あすは炉に投げ入れられる野の草でさえ、神は…装って下さる のだから、人に対してはそれ以上よくしてください はずであり、以上のことを認めないのは、信仰の薄い者たち(8・26、14・31、16・8、17・20)に他ならないということである。思いわずらいの根源は結局、不信仰である。野の花は働きもせず、紡ぎもしない それなのに神は…装って下さる 神に信頼しているなら働かなくてよいと言っているわけではない。神の摂理と配慮はそれほど豊かだということである。

31、34 a 思いわずらうな 6回出てくる同語のうち(25、27、28、31、34 a b節)、この2箇所のみ不定過去時制。「神は…あなたがたに必要なものはご存じ」(8節)ゆえ、今後は二度と思いわずらうなという強い意味が込められている。

32 理由を示す接続詞(ガル)に導かれて、「思いわずらうな」と命じる二つの理由が記されている。第一の理由は、これらのものはみな、異邦人が切に求めているもの で、真の神を知らない人と同じことをするのは愚かなことだからである。切に

求めている 現在時制は、とどまることのない追求を示している。第二の理由は、天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じ だから、すなわち愛なる神に知られているからである。

33 これまでの「思いわずらうな」という否定命令が、求めなさい という肯定命令に変わる。本日(の箇所)におけるクライマックスである。神の恵みによる支配のこと。神の義 神との正しい関係のことであるが、ここでは神の御心に従って生きることを意味している(5・6、10、20、6・1)。求めなさい 現在時制であるから、求め続けなさい、の意。神の恵みの支配の下、神の御心に従い、神を第一として歩み続けるなら、これらのものは付録としてすべて添えて与えられる。

34 十分である 原文ではこの語が冒頭に置かれて強調されている。今日一日の苦勞が十分にあるのに、その上に明日の苦勞までもつけ加えるのは実に愚かなことである。あすのこと を知る神に全幅の信頼を寄せて、一切を委ねるのである(詩篇68・19)。(1)信仰とは、何もしないことではない。全力を尽くすことである。(2)信仰とは、自分が何もかもすることではない。神に一切をゆだねることである。(中略)真の信仰とは、神にまかすならば、神にまかせ切ることができるものなのです(野田秀「努力と信仰の関係」)。

参考文献 野田秀『仰ぎ見る生涯』(いのちのことば社) D.A. Carson 『Matthew, The Explicator's Bible Commentary, Vol. 1.8 (Zondervan) 他

聖書 マタイ6・25〜34
 タイトル 野の花
 暗唱聖句 野の花がどうして育っているか、
 考えて見るがよい。マタイ6・28
 目 標 花の日の由来を知り、愛の一日
 としよう。

導入

(木村純)

一八五六年のことです。アメリカのある町の教会で、六月の第二日曜日に、子どもと大人と一緒に礼拝を守りました。その時会場は、リボンで結んだたくさんのお花で飾られていました。牧師先生は、7歳になる子どもたちに聖書をプレゼントし、その頭に手を置いて、一人一人に神様の祝福をお祈りしました。これが最初の「花の日」礼拝でした。それから、あちこちの教会で「花の日」の礼拝が守られるようになったのです。その後、この日は「子どもを神様にささげる日」「子どもの祝福を祈る日」として、「子どもの日」とも呼ばれるようになり、さらに広まっていきました。そして礼拝の後、会堂を飾ったお花を持って、病氣の人をお見舞いしたり、日頃お世話になっている人たちにお礼に行くようになっていきました（金井由信著『小さなささげもの』）。

天の父の愛を現す空の鳥、野の花

ある時イエス様は、山の上で弟子たちやたくさんの人々にお話をされました。その中でイエス様は、「何を食べようか、何を飲もうかと自分のからだのことで思いわずらってはいけない、心配して

はいけない」と言われ、その理由をお話しになりました。まずイエス様は、「空の鳥を見なさい」と天を指差しました。この地球上にはどれくらいかの鳥が生息していると思いますか。空の鳥は自分で種をまいたり、刈り入れたり、倉庫に納めたりはしませんね。でも天のお父様が、そのすべての鳥たちを毎日養ってくださいます。天のお父様は、名もない子雀一羽さえも、み心に留めていてくださる愛なるお方なのです。続いてイエス様は、「何を着ようかと心配してはいけません」と言われました。そして野に咲いている花々を指差して、「きょうは生えていて、あすは炬に投げ入れられる野の草でさえ、神はこのように装って下さるのなら、あなたがたに、それ以上よくして下さらないはずがあるうか」と教えられました。空の鳥、野の花など、神様が造られた自然界は、何の心配もすることなく、全部を天の父なる神様にお任せすべきことを、私たち人間に教えていくくれるのです。

私たちの必要を満たす天の父

天の父なる神様は、ご自分が造られたすべてのものの中で、私たち人間のことを一番大切に思っていてくださいます。ですから、あなたがたは何を食べようか、何を飲もうか、何を着ようかと二度と心配してはいけませんと、イエス様は繰り返し力強くおっしゃいました。思いわずらうというのは、心がバラバラに引き裂かれて乱れてしまうという意味です。皆さんはどうでしょうか。どんなことを思いわずらい、心配しますか。だんだん大きくなるにつれて、悩みや心配事も増えていきそうです。特に今は、お仕事がなく、お金もな

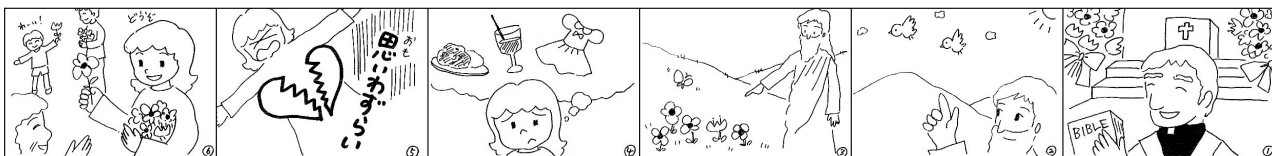
く、住む家さえもない人たちが増え、生活するのが大変な時代です。先のことを考えると、心配で眠れず、望みを失って、多くの人たちが不安や悩みを抱えて生きています。そのような中でイエス様は、「あなたがたの天の父は、これらのものが、ことごとくあなたがたに必要であることをご存じである。まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」と言われました。

それは、イエス様を救い主として私の心にお迎えして、神様を第一に、神様のみに従って生きるということ。そうすれば、私たちの生活に必要なすべてのものは、神様が与えてくださると約束してくださいました。ご自分の大切なひとり子であるイエス様さえも、私たちの罪の身代わりとして与えてくださった天のお父様は、イエス様のみならず、私たちが必要とするすべてのものを与えてくださるのです。天のお父様の子どもとされることは、何と幸いなことでしょう。

まとめ

本当の神様を知らないこの世界は、ますます真つ黒な闇で覆われていきます。そのような中で、本当の神様を知り、天のお父様の愛をいっぱいいただいたら、私たちは、花の日の今日、お花を持って、神様の愛を、いろいろな方々にお届けさせていきたいと思います。神様が愛をもつて造られ、生かしていただく小さな私たちが、美しい花々を通して、神様の愛と慰めを、たくさんの方々に届けられる一日でありますように。

(讃美歌第二編26)



聖書 箴言6・20～23 テーマ 父の戒め

序論

(加藤)

今週は父の日であるが、日ごろ教会に来にくい父親を教会に招く良い機会である。

またせっかくの父の日なので、私たちも、聖書の教えに基づいた家族関係の理解に努め、地に足のついたクリスチャンホームの形成に努めたい。

二、家族形成の礎

「わが子よ、あなたの父の戒めを守り、あなたの母の教を捨てな」。

箴言の中には、親と子の関係について多く教訓が語られているが、このみ言葉も子どもが両親の戒めと教えを守ることを勧めている。

ここで気がつくことは、家族関係は、父母と子どもの健全なコミュニケーションによって保たれるということである。子どもは、家庭の中で、父親の戒めに耳を傾け、母親の教えることを聞いて育っていく。それは決して形式的なものではなく、温かい親子の交わりの中で営まれる行為である。しかしそこで両親が子どもに与える戒めの内容は、しっかりとした基準がなければならぬ。その基準とは律法である。

「律法を守る者は賢い子である、不品行な者と交わるものは、父をはずかしめる」(28・7)。

両親が、人間的な知恵によるのではなく、神から与えられた律法、即ち、み言葉の教えに基づいて、子どもを養い育てていく。そして子どもも両親

親の揺らぐことのない信仰姿勢に感化されていく。そのような中にこそ、神を敬う家族が形成されていくのである。

三、父親の務め

子どもの成長過程で、父親が負う責任は重い。父親は愛するわが子に、み言葉に基づく戒めを、教え諭す役目を負っている(3・12)。子どもを信仰に導くのは、仕事で家庭を支えることと同様に、クリスチャンの父親の一大事業である。決して子どもの信仰に無関心であってはならない。

そのために父親が心に留めるべきことは、まず父親自身が、主の前に真実に歩むということである。子どもは父親の短所も欠点も良く知っている。それでも子どもが父についていくのは、父親が本気で神に従って歩むからである。

また父親は子どもに愛情をもって、良い関係を保つことを心がけ、いたずらに子どもを怒らせずに、信仰に導かなければならない。

「父たる者よ、子供をおこらせないで、主の薫陶と訓戒とによって、彼らを育てなさい」(エペソ6・4)。

父親の戒めが、子どもにとって有益なものとなるためには、子どもの心が開かれなければならない。子どもの人格を尊重し、日頃から子どもを理解しようとする、良き関係を保ち、折になつたアドバイスを送る時、子どもは父を信頼し成長していくのである。

また父親は、子どもが教会に繋がるように心砕いていただきたい。そのために、妻と協力し、牧

師や教会学校の教師等と良く連絡をとって、祈り育てていただきたいものである。

三、子どもの努め

箴言は、子どもは、親からの戒めと教えを常に心に留めるようにと、繰り返し勧めている。

「知恵ある子は父の教訓をきく、あざける者は、懲らしめをきかない」(13・1)。

子どもはいたずらに親に逆らい、その教訓を軽んじ、主の道から外れてはならない。それは愚かな行為であり、両親にとっても悲しみである。

「愚かな者は父の教訓を軽んじる」(15・5)。

「愚かな子を生む者は嘆きを得る、愚か者の父は喜びを得ない」(17・21)。

サムエル記において、シロの祭司エリの子どもらが主の供え物を軽んじたという記事があるが、実に痛ましい。彼らは父の戒めに耳を傾けなかった。結果として祭司エリの家系は祝福を失うことになるが(サムエル上2・12～3・18)、父親であるエリにとってどれほどの悲しみであつたか。

聖書に示される、「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主が賜わる地で、あなたが長く生きるためである」(出エジプト20・12)という戒めは不変の真理である。子どもが心から両親を敬い、彼らの言葉に耳を傾けるならば、主は豊かな祝福をもって人生を導いてくださるのである。

結論

父は子どもの信仰のために心遣いし、子どもは父の戒めに耳を傾け、神を敬う者となろう。

研究資料

(木村)

箴言には、親子に関する教え、特に子どもの教育について繰り返し記されている。

テキスト

20 わが子よ この呼びかけは、1・8に初出以来、これで16回目である。エジプト、バビロン、アッスリヤ、ユダヤの知恵の書において、師が弟子を呼ぶときに共通して用いられる呼びかけであるが、父母は子どもの宗教・道徳教育における最初の教師であり、神の代理者として子どもを教育することが父母の第一の責任であるゆえ、この呼びかけがここでも用いられているのである（申命記4・7～9、列王上2・1～9）。親は子にまず十戒（出エジプト20・2～17）を教え、祈りを教え、毎年の祭りのたびに神による救いのみわざについて語り伝えた（出エジプト12・26～27、13・8、14、申命記4・9、32・7、ヨシヤ4・6、詩篇44・1、ヨエル1・3、他多数）。**父の戒め…母の教** ここに**父と母**が共に出てくるのは、そのようなことを効果的に教えるには父性と母性の両方が必要だからであろう。聖書中、本書ほど母を愛し敬うよう奨励している書は他にない（1・8、4・3、10・1、15・20、19・26、20・20、23・22、25、30・17）。本日の箇所は、父母の訓戒に従うことの重要性を教えているが、これは24～35節に記されている姦淫の罪を避けるよう命じる箇所と関連して語られており、その序文に相当する。そして第7章では同様の内容がさらに発展して引き継がれており、6・20～7・27は、本書中、

姦淫の罪について取り扱う最も長い箇所となっている。**父の戒め…母の教** と言っても、ただ単なる父母による訓戒ということではない。「きょう、わたしがあなたに命じるこれらの言葉をあなたの心に留め、努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならぬ」（申命記6・6～7）とあるように、父母が律法に基づいて教える訓戒のことである。23節では、「戒め…教…教訓」と3種類の表現がなされているが、結局これらすべては律法を中心とする神のみ言葉と理解してよいであろう。ここでは直接的には、24節以下に記されている姦淫の罪を避けるために、**あなたの父の戒めを守り、あなたの母の教を捨てるな**と命じられている。

21 心に結び 「父の戒め…母の教」を慈しみ、忘れないようにしっかりと心に留めることである。**首のまわりにつけよ** 「父の戒め…母の教」を、宝石の首飾りのように大切にすることである（1・9、3・3、7・3）。**つけよ**（アーナド）は、こことヨブ31・36（「結び」と訳されている語）のみに用いられる語。箴言3・1～3、7・1～3、出エジプト13・9、16、申命記6・6～9、11・18にも同様の命令がある。ユダヤ人は後に敬虔を表そうとして、出エジプト13・1～10、11～16、申命記6・4～9、11～13を記した「経札」を頭と腕に結び付けていた（マタイ23・5）。しかし大切なことは、頭の働きと手のわざの根底には神のみ言葉が常にあること、すなわち、み言葉を片時も忘れず黙想し、それに従って生きることには他ならない。

22 申命記6・7では「努めてこれをあなたの子らに教え、あなたが家に座している時も、道を歩く時も、寝る時も、起きる時も、これについて語らなければならぬ」と命じられている。これと類似した表現を用いることにより、日常生活におけるみ言葉の働きの重要性を強調している。み言葉は、姦淫の罪を避けさせるために、**絶えず導き…守り…語る**。

23 原文冒頭には、前の22節の理由を示す接続詞（キー）があるので、新改訳「…訓戒のための叱責はいのちの道であるからだ」が適訳である。み言葉は人の心と意思を照らし、正しい道へと先導すると**もしび…光…命の道**として、「あなたを導き…あなたを守り…あなたと語る」のである（箴言13・9、20・20、24・20、詩篇19・8、119・105）。それによつて時に叱責されるが、それは**命の道**に立ち帰らせるためのものである。み言葉は私たちを慰め励ますだけでなく、「人を教え、戒め、正しくし（新改訳は「矯正」、義に導くのに有益である」（Ⅱテモテ3・16、ヘブル12・5～11）。しかし、み言葉による叱責を拒絶して、「悪い女…みだらな女…遊女…隣の妻」に走るならば、それは死の道である（24～35節）。

参考文献 鍋谷堯爾「箴言」『新聖書講解シリーズ旧約13』（いのちのことば社）、F. Delitzsch『Proverbs』Commentary on the Old Testament, Vol. 6 (Hendrickson), E. C. Wolf『Proverbs』Beacon Bible Commentary, Vol. 3 (BHP) 他

聖書 箴言6・20〜23

タイトル 父の日

暗唱聖句

わが子よ、あなたの父の戒めを守り、あなたの母の教を捨てな。
箴言6・20

目標 父に感謝し、父の戒めを守ろう。

導入

(木村純)

皆さんにとって一番怖いものは何でしょうか。少し前まではこの世で一番怖いものとして、「地震、雷、火事、親父」という言葉がありました。皆さんのお父さんはどうでしょうか。普段は優しく、一緒に遊んでくれるけど、怒るとやっぱり一番怖い存在でしょうか。

肉の父の教え

「わが子よ、あなたの父の戒めを守り、あなたの母の教を捨てな」とあります。お父さん、お母さんは毎日、私たちにいろいろなことを教えてくれますね。お勉強でわからないところとか、料理の仕方、大工仕事など…。でもそれと同時に、私たちが人間としてどのように生きていくべきか、悪いことから守られるために、どのようなことに気をつけなければならないかなど、とっても大切なことを教えてくれます。もしも悪いこと、間違ったことをしたときには、本気で叱ってくれます。それでも私たちの心がなお頑固で、言うことを聞かないときには、とうとう愛の鞭が飛んできます。皆さんにもそのような経験がありますか。その時は、痛さとともに涙も出てきますが、「ごめんなさ

い」が言えたとき、抱きしめてもらおう胸の中で、お父さん、お母さんの大きな愛を感じることができそうです。お父さん、お母さんは、皆さんの幸せを願い、教え、戒め、叱ってくれるのです。

霊の父の教え

私たちの幸せを願っているのは、お父さん、お母さんだけではありません。私たちを造り、命を与えてくださった天のお父様は、私たちの行く道のすべてに心を留めていてくださいます。23節に「戒めはともしびである。教は光である、教訓の懲らしめは命の道である」とありますが、天のお父様は、聖書のみ言葉によって、絶えず私たちを教えて、正しく導いてくださるのです。新約聖書の中に「聖書は、すべて神の靈感を受けて書かれたものであって、人を教え、戒め、正しくし、義に導くのに有益である」(Ⅱテモテ3・16)と書いてあります。神様は、私たちの歩みが間違っているとき、み言葉によって叱り、正しく歩むように教えてくださいます。神様が言われることを素直に聞き、従っていくとき、私たちは間違いのない命の道を歩むことができます。

例話

先日、アメリカの第44代大統領としてオバマ氏を選ばれましたが、今日はそのもつと前の第39代大統領として選ばれたジミー・カーター氏のお話です。ジミーの家は家族皆が神様を信じ、教会へ行っていました。ジミーが5歳の時、教会から帰り、上着やズボンのポケットにあるものを出そうと手を入れた瞬間、ジミーの顔は青ざめてしまいました。お父さんはそれを見逃さず、ポケットか

ら全部出すように言いました。タンスの上に硬貨を2つ並べて置きました。するとお父さんが言いました。「教会学校の献金として、お父さんがお前に1ペニーをあげた。献金したはずの1ペニーがここにあるだけじゃない。もう1ペニーあるじゃないか。これはどういうわけだ。説明しなさい」。ジミーは肩で大きく息を吸い、からだを震わせながら答えました。「献金皿がまわってきたとき、献金しないでそのお皿にあった献金皿から1ペニーを盗ったんです」。ジミーは自分が本当に悪いことをしたことをからだ中に感じました。お父さんの部屋に呼ばれて行くと、細長い桃の木の小枝を手にしていたお父さんが言いました。「だれも恨んではいけないよ。神様が悪いのではない。私が意地悪だからでもない。神様のものを盗んだジミーが悪いからだ」と、足のふくらはぎのところに桃の枝の鞭が2度、3度飛んできました。このようにジミーの両親は、なによりも神様の前に正しく生きるよう、祈りながら、時には厳しく子どもたちを育てたのでした。その後ジミーは、11歳の時にイエス様を救い主として信じて、バプテスマを受けました。ジミーが大統領に就任するとき、お母さんから贈られた聖書に手を置いて、アメリカ建国の原点である神の言葉によって政治を行うことを宣誓したのです(玉木功著『ジミー・カーター』)。

まとめ

父の日の今日、私たちが、愛をもって教え、戒め、義しく導いてくれる、お父さんや天の父なる神様に感謝して、その教えに従って歩んでいきましょう。

♪父の涙♪

(ミクタム)



聖書 Iコリント15・35～44

テーマ 霊のからだ

序論

(加藤)

私たち信仰者が与えられている大きな恵みは、終わりの時に、キリストのよみがえりの命にあずかるという希望である。それ故に、パウロも自らの手紙の中で、よみがえりの恵みを伝えることに労を惜しまなかった。今日はその所から学びたい。

一、コリント人の復活への疑問

パウロは、教会を形成していく上で、様々な問題を解決する必要があった。その一つが復活の理解の問題である。当時の人々、とりわけコリント教会の人々の中にも死人の復活を否定する者がいたからである(15・12～19)。

そこでパウロは、彼らの疑問に答えて、他の人々の復活に先立つて、まずキリストが、眠っている者の初穂として、死人の中からよみがえったことを明らかにしたが(15・20～28)、なお彼らの内に疑問が残った。それは、もしパウロが言うように死人が復活するのなら、〈どんなふうにして〉、〈どんなからだをして〉よみがえるのかという問いである。

二、新しい体としての復活

これに対してパウロは、種まきに例えて復活を説明する。

〈おろかな人である。あなたのまくものは、死ななければ、生かされないではないか。また、あ

なたのまくのは、やがて成るべきからだをまくのではない〉。

復活は、まかれた種が一度死んで、そこから新しく実を結ぶようなものである。一度死ななくては、決して新しい体となることはない。

このパウロの教えは、何より主イエスのお言葉に従っている。

「一粒の麦が地に落ちて死ななければ、それはただ一粒のままである。しかし、もし死んだなら、豊かに実を結ぶようになる」(ヨハネ12・24)。

死んで葬られて後、弟子たちの前に現れた復活のキリストは、弟子たちにも、それと分かるような、以前と変わらない姿をしておられた(ヨハネ20、21章)。

けれども、一度死んでよみがえった主のお体は、決して以前と同じではなかった。復活とは生き返る、あるいは再構成されるということではない。まったく新しい体になることなのである。

〈神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる〉とあるように。

しかし、同時に、復活する者は、それぞれまかれた種に応じて、相応しい新しい体を持つ。この点についてパウロは、それぞれの生き物の持つ固有性を良く認識していた。

〈すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。天に属するからだもあれば、地に属するからだもある〉。

よみがえった人の心も体も、決して固有性を失

うことはないのである。

三、霊の体への復活

パウロはもう一度、当初の疑問に返って、答えて言う。地上にまかれた種がそれぞれ新しく生まれ変わるように、死人も全く新しい体をもつてよみがえる。

〈死人の復活も、また同様である。朽ちるものでまかれ、朽ちないものによみがえり、卑しいものでまかれ、栄光あるものによみがえり、弱いものでまかれ、強いものによみがえり、肉のからだでまかれ、霊のからだによみがえるのである〉。

ここで興味深いのは、パウロが言及する〈霊のからだ〉と言う言葉である。言うまでもなく、復活する以前は、人間の体は〈肉のからだ〉であった。それは、この世の営みの中で朽ち果てて死すべきものであったが、キリストが復活した今、〈肉のからだ〉たる私たちは〈霊のからだ〉とされるのである。そしてこの〈霊のからだ〉は、この世ではなく、来るべき神のみ国に住むに相応しい、朽ちることのない体である(15・20～28、50、ピリピ3・20、21)。

その故に今、私たちはバプテスマを受け、キリストの体なる教会につながり、聖餐(せいさん)を分かち合い、〈霊の体によみがえる〉希望にあずかっている。そのことを確信し喜びと感謝をもって歩みたい。

結論

私たちは、終わりの時に霊の体によみがえることを確信して、希望を持って主の業に励もう。

研究資料

(木村)

「死人の復活などはない」(12節)と主張する人々に対して、パウロは「もし死人の復活がないならば……もしキリストがよみがえらなかったとしたら……」どうなるかについて語り、反論した後(12～19節)、キリストの復活がいかに豊かな希望をもたらすかについて語った(20～28節)。さらに、復活の否定がいかに恐るべき影響をもたらすかについて語った(29～34節)。すると当然35節の疑問が出てくることを想定して、植物のたとえ(36～38節)、動物のたとえ(39～40a節)、天体のたとえ(40b～41節)を用いて、魂だけでなくからだもよみがえること、朽ち果てた肉体がどのようにして復活のからだに変えられるのか、復活のからだの特質等について記す。

テキスト

35 どんなふうにして、死人がよみがえるのか についての回答が36～38、50～57節であり、**どんなからだをして来るのか** についての回答が39～49節である。

36 パウロは言下におろかな人である(原文では一語。ルカ11・40、12・20)と一喝した直後、**あなた**という語を強調的に用い、反対者自身も身近に経験しているであろう種まきを例に挙げる。種はまず土の中にまかれて**死ななければ**(種というあり方に死ぬ)、新しい芽を出さず、**生かされない**(ヨハネ12・24)。このように自然界にも死と復活が密接に結びついた現象があるのだから、霊の世界にあっても少しも不思議ではない。

37～38 まくのは、やがて成るべきからだ(収穫

物)ではなく、種である。麦であつても、ほかの種であつても、種をまくと、その種がそのまま顔を出すわけではなく、種とはまるで姿かたちの異なる芽が出てくる。同様に、「まくもの」(地上の肉体)と**やがて成るべきからだ**(復活のからだ)とは明らかに異なっている。それは、神の**みこころのままに**(不定過去時制)、神の主権的な力に基づいてなされることである(マルコ12・24)。

39～41 前の38節の例証である。肉(サルクス)「古き人」とも言われる神に反逆する性質(ローマ6・6、ガラテヤ5・19～21等)のことではなく、ここでは単なる「からだ」(ソーマ、38、40節)、肉体のことである。その肉体でも、**人の肉と獣の肉と鳥の肉と魚の肉**とでは違いがある。天に属するからだ 次の41節とのつながりから、天体のことであろう。地に属するからだ 地上に見られる様々なかたちの中で、パウロの脳裏には高い山や森、峡谷等が浮かんでいたのではないか。両者は明らかに異なる。その天体でも、**日の栄光と月の栄光と星の栄光** とは、その輝きに明らかに違いがある。以上のように、現在のからだと復活のからだとはその栄光が異なる。

42～43 36～41節で見てきたように、植物でも動物でも天体でも明らかに違いがあるのだから、今生きているからだは復活のからだとは異なるのは至極当然のことである。それは、「肉と血とは神の国を継ぐことができないし、朽ちるものは朽ちないものを継ぐことがない」からである(50節)。神の国を継ぐために、天国で永遠に主と共に生きるために、霊のからだに与えられるのである。42節以下に6つの対比がある。(1)「朽ちるもの」と「朽ちないもの」(42節)(2)「卑しいもの」と「栄光あるもの」(43節)(3)「弱いもの」と「強いもの」(43節)(4)「肉のからだ」と「霊のからだ」(44節)(5)「土に属している形」と「天に属している形」(49節)(6)「死ぬもの」と「死なないもの」(53節)。**卑しいもの** この語は時々、市民権の喪失について用いられる。死体には何の権利もない。**弱いもの** 腐敗していくことに抵抗できない死体のこと。**強いもの** 永遠のいのちそのものである復活のからだのこと。

44 35節の問いに対するこれまでの回答の頂点である。**肉のからだ**(ソーマ・プシュキコン) 生まれながらの生命のからだのこと。**霊のからだ**(ソーマ・プニューマティコン) 聖霊が生かし支配するからだのこと(創世記2・7)。復活のからだかどのようなものであるかを具体的に教えるのが、ヨハネ第20章である。からだに巻かれていた亜麻布を通り抜けて復活し(6～8節)、弟子たちがユダヤ人を恐れて戸という戸を全部閉めていたのに、戸を通り抜けることができるからだである(19、26節)。また、弟子たちと共に食事をされたり(21・12～15)、十字架の傷跡を見せたりされるからだである(20、27節)。しかも、誰の目にもイエスだと識別できるからだ、それが**霊のからだ** である。そのように変えてくださるのが、「眠っている者の初穂」、「最後のアダム」なるキリストである(20、45節、ピリピ3・21)。

参考文献 宮村武夫「コリント人への手紙 第一」『新聖書注解 新約2』(いのちのことば社)・L.Morris『1 Corinthians, Tyndale New Testament Commentary, Vol. 7 (IVP) 他

聖書 タイトル 暗唱聖句

Ⅰコリント15・35～44
霊のからだ
肉のからだでまかれ、霊のからだ
だによりがえるのである。
Ⅰコリント15・44a
信じる者の未来が希望に満ちて
いることを知る。

導入

(木村純)

パウロが手紙を書き送ったコリント教会の人々の中には、肉体は汚れたもの、悪いものであり、滅びるものだと考え、からだの甦り(よみがえり)を信じない人々がいました。その人々に、キリストが死人の中から甦られたように、主を信じる者にもからだの甦りがあること、それがどんなに希望に満ちたものであるかということをパウロは心を熱くして教えたのです。皆さんは、からだの甦りを信じますか。

復活の方法

「どんなふうにして、死人がよみがえるのか」(35節)という問いに対して、パウロはまず種の例をもって答えました。お花の種をまいたとします。種は土に埋められ、種の形はなくなっていきましたが、そこから芽が出て、葉が大きくなり、やがて美しいお花が咲きます。種が新しい姿となって現れるのです。そこには、その種に仕組まれている自然のいのちがあり、創造主である神様の御力が働いているのです。同じように私たちの肉体は、死ぬと土のちに帰りますが、やがてイエス様がもう一度来られるとき、終わりのラッパの響きとともに、私たちのからだは一瞬にして復活のから

だ、栄光のからだに変えられます。神様はその御力をもって、私たちが想像もできないほどの素晴らしい霊のからだに甦らせてくださるのです。

復活のからだ

では、その復活のからだ、新しい霊のからだとはどのようなからだなのかという問いに、パウロは今度、動物や天体の例をもって答えました。動物のからだにもそれぞれ違いがあります。天体の星にもそれぞれの栄光があります。同じように、この地上の肉のからだと天上の霊のからだにも違いがあります。今私たちが持つているこの地上のからだは、疲れたり、病気をしたり、だんだん年をとり、弱り、朽ち果ててしまいます。けれども復活のからだは、病気をしたり、年をとったりしない、強く、二度と死ぬことがないからなのです。神の霊によって完全に支配された、罪のない栄光のからだです。復活のからだは具体的にどのようなものであるのかを表したのが、死人の中から最初に復活されたイエス様です。復活のイエス様を見たとき、弟子たちは恐れ驚いて、霊を見ているのだと思いました。しかしイエス様は、弟子たちと共に食事をされたり、十字架の傷跡をお見せになったりと、誰の目にもイエス様だとわかる新しい霊のからだをもって復活されました。その復活のからだは、葬られたときからだに巻かれていた亜麻布を通り抜けて復活され、弟子たちがユダヤ人を恐れて、戸を全部閉めていたのに、戸を通り抜けることができ、またある時は、500人以上の人々に同時に現れることができるからでした。

例話

篠原せつ先生は、2歳の頃、ポリオという病気にかかり、その後遺症で両足に麻痺が残ってしまいました。人前で転ぶことが恥ずかしく、ふさぎ込むことも多くなりましたが、お母さんは、訓練のためにと、座ってできるすべての手仕事を身につけさせました。やがて、ある家庭の教会学校にお姉さんと通うようになり、聖書のお話を聞いていたが、「こんなからだはいらない」と神様に文句ばかり言うていました。けれどもある日、傲慢な自分の姿がわかり、神様と両親の前に手をついてお詫言しました。そして聖書を読むうちに、イエス様の救いは、心だけでなく、からだにも及ぶ丸ごとの救いだということがわかり、その希望に生きる人となったのです。

まとめ

皆さんの中にも、からだの不自由を感じているお友だちがいるかもしれません。でもここに、やがて神様によって与えられる素晴らしい希望があります。「彼は、万物をご自身に従わせうる力の働きによって、わたしたちの卑しいからだを、ご自身の栄光のからだと同じかたちに変えて下さるであろう」(ピリ3:21)。再臨の日、私たちはこの地上の弱い不完全な肉体を脱ぎ捨て、キリストと同じ栄光のからだを着せていただけるのです。その日は、私たちの救いの完成の日であり、それはこの肉体にまで及びます。イエス様を信じる者は、新しい霊のからだをいただけるので、天国で永遠に神様と共に生きることができるようになります。神様のお約束と御力を信じて、私たちもこの希望に輝いて歩ませていただきましょう。
♪イエスさまのさいりん♪

(ふくいんこどもさんびか76)



牧羊ひろば

地方子ども伝道奮闘記

三春新生教会 田代美雪

〈はじめに〉

「田舎の教会の児童伝道の様子」とのお声がかかりましたので、手探りながらの三春での2年間の様子を記させていただきます。一つは教会学校、もう一つは地域伝道の働きを記させていただきます。

〈教会学校〉

現在、日曜日の教会学校は生徒1名。知的なハンディをもつ16歳の生徒です。

その保護者1〜3名と教師1名で礼拝をささげています。

CS礼拝は日曜9時15分〜10時。出席シールとみ言葉カードを貼り、ギター伴奏にあわせて賛美をします。生徒の親である司会者がお祈り、み言葉朗読、聖書紙芝居、賛美、感謝（生徒がお祈り）、最後に皆で主の祈りをささげます。その後、簡単なお茶タイムとゲームをします。特に振り付け賛美や聖書朗読を皆、はりきってしています。

テキストは、現生徒と地域の子どもを



朝の教会学校1

対象に考え、『子どもバイブル』という絵本を紙芝居風に、自分なりにシナリオをアレンジして用いています。例えば、アブラハムの出発の場面では、『お兄さん、皆さん、今までお世話になりました。私たちは…（略）…みなさんもお体に気をつけて』（ロトが）『待つてください！ばくも連れていってください！』『おや？ロトかい』という風に…。最後にシヨート・メッセージを語ります。より良いお話の為に『紙芝居をつくる』という本などで研究しています。

CS礼拝の部屋にいつも歌かけ、み言葉、主の祈り、プログラムをかけているので地域の遊びに来る子どもたちも、「もくとうって何？」とか、「へんな歌〜。たしらが作ったの？」「ふざけて」母よ、彼らをおゆるしください（「コラッ」）などと興味を示します。日曜にも何人か来られたのですが、今集っている生

対象に考え、『子どもバイブル』という絵本を紙芝居風に、自分なりにシナリオをアレンジして用いています。例えば、アブラハムの出発の場面では、『お兄さん、皆さん、今までお世話になりました。私たちは…（略）…みなさんもお体に気をつけて』（ロトが）『待つてください！ばくも連れていってください！』『おや？ロトかい』という風に…。最後にシヨート・メッセージを語ります。より良いお話の為に『紙芝居をつくる』という本などで研究しています。



朝の教会学校2

徒と馴染まず、難しさを感じます。土曜に子ども集会を開きたいと祈っています。

CSでは各行事のプレゼントを作ります。イースターエッグ・父の日・クリスマスカード等。又、愛餐会で賛美を披露します。クリスマスには祖父母の方（元学校の先生）も加わって、大紙芝居や人形劇の声の吹き込み、色塗りを御家族でされました。とても上手で皆、感動しました。子ども大会で、地域の子どもたちとの交わりを図っています。

〈地域の活動〉

○「まほらっこ教室」（放課後ボランティア）

町の方はともかく、この教会の近所では歩いて



まほらっこ風景



誕生会



子どもが作ったチラシ

子どもが「中学に入ったらバスケットボール部に入る」と言うので、「教会にゴールがあるから来ない？」と誘ったところ、「いいつ？」と聞くので、「ええ、今度の土曜は？」「じゃあ、行く」とすんなりOK。土曜日

「はて？どうしたものか？」と悩んでいたところ、教会員の方が、町で運営する各小学校での放課後ボランティアを勧めてくださいました。

○子どもたちが初めて来た日

役員会でバスケットゴール設置が許可されました。あるボランティアの日、子どもが「中学に入



野球する子ども

には男の子五人が来てくれて、その内二人が次の日のCSに来てくれました。その後、近所の兄弟二人が来るようになり、最初の中に入る時もおどおどとして、牧師がお祈りするとひいていました。後で「教会は死んだ人がいる所」と聞かされていた子どももいると知り、田舎での偏見を知りました。しかし、秋には教会の駐車場で、男の子たちが野球をするようになりました。

○献堂記念礼拝&ミニバザー

秋の献堂記念礼拝にタコ焼き・焼きそばのミニバザーをしました。東北ではタコ焼きは大人気です。初めての試みで、てんやわんやでしたが、綿菓子機も町からお借りし、天候も良く、近くの教会からも、ご近所からも来てくださいました。校長先生にチラシ配布の許可を願うと、『まほらっ子』で配るならどうぞ』と、お墨付きで配らせて



もちつき大会1



もちつき大会2

いただきました。チラシには「タコ焼き一皿50円券などのタダ券が付くのですが、「お金とるなんて教会はどろぼうだつて、父さん言つた」と言われたりもしました。が、子どもたちが券を握りしめて嬉々として来てくれました。恵みにより会計も満たされました。

○子どもクリスマス会

初めての子ども集会を開きました。全校生徒70数名の学校で25人の生徒が集まりました。ビバオ、ゲーム、ビンゴなどをしました。日ごろのわんぱくたちも、メッセージを真剣に聞いていました。

○不思議な出会い

まほらっ子教室で、私が女の子にケガをさせて

○2年目の春
冬の間、姿を見せなかった子どもたちが、暖か

で仙台に入院した時もお見舞いに行ったところ、御家族に喜ばれました。三春での2年目は、その女の子を中心に毎土曜に兄弟・友だちが遊びに来、その子どもたちが中心になって夏の子ども大会のポスターやチラシを作り、夏の教会の集会にも出席してくれました。「神のなされることは皆その時にかなつて美しい」（伝道3・11）。



しまいました。
実は、その子
はすぐ2軒隣
の家のお孫さ
んで、お見舞
に行きました。
その後、その
女の子が病氣

ミニバザー



みはるしんせいきやうかい
三春新生教会

10月19日(日)

三春新生教会
みはるしんせいきやうかい
10月19日(日)
献堂6周年記念

かんげいせいはい
歓迎礼拝

午前10:30
~11:30
かりやうし聖書のお話 生演義による賛美タイム

午後12:30
~3:30

ミニバザー

たがし 焼そば ヨーヨー わたがし
一皿50円 一皿50円 一回50円 無料

教会の中でも自由に見学ください。卓球もできます。

連絡先：三春新生教会
牧師 村田 浩吉 美響 電話 0247-62-2350
牛車引山優待券

50円券 50円券 50円券 わたがし券

ミニバザーチャシ

と決まったらしく、「今日は何作るの？」と聞きます。私も多兄弟の為、安くて多人数で分けられるおやつで育てられた事を母に感謝することです。

○夏のビデオ&アイスクリーム大会

初めての夏の子ども大会をしました。ヨーヨー
つりなどもしました。近所の子ども17名出席。夏
休みは教会で自由研究などをしていました。

○2年目・献堂記念&ミニバザー

子どもたちがチラシ配り・看板作成をしてくれました。白河栄光教会から、また、近所の方からも応援がありました。教会員の御家族も総出で、80名（内子ども43名）程の方が出入りし賑わいま



した。会堂内でもゆつくり遊べて、子どもたちはバレーンアート、親子で卓球などを楽しみました。

○クリスマス

子どもクリスマスでは人形劇マルチンをしました。子ども41名、大人14名出席。また夜の集会のキャンドルサービスにも、ボランティア仲間の方が親子4人で来てくれました。



〈最後に〉

田舎の方では一人の子どもと知り合うと、その親族の方々とどこかで出会ったりします。また、一軒の家に配るチラシが口コミでその周囲に広がります。また、教会で子どもの声がしていると、近所の、特にこの高齡の方々が喜んでくださいます。教会の皆さんも喜んで祈り支えてくださいます。まさに児童伝道は地方伝道の第一線と肌で感じます。早天では教会員家族に加えて、ボランティアで出会った子どもたち、ボランティア仲間や学校の先生等の名を挙げてお祈りします。子どもたちは特に変わりやすいのですが、主にお委ねしつつ祈り続け、主と人に仕えていきたいと願います。

「おわりに」

『牧羊者』二〇〇九年度第一巻をお届けできますことを感謝します。執筆者の方々には教会総会など大変あわただしい中を執筆していただき、心から感謝いたします。

小野淳子先生が、教師養成講座に、「整えられたCS教師」を記してくださいました。もう一度CS教師への召命を新たにし、整えられた者とされたいものです。

また今号からの新力リキゾムの解説をご覧ください。

牧羊ひろばに掲載された、三春新生教会の、「地方子ども伝道奮闘記」を読んで励まされます。

子ども聖書日課がベラカ社より、「きょうのマナ」として発売されました。子ども聖書日課がジュニアだけでなく、年を重ねた方々からも愛用されていることを伺い、励まされております。今後も、「牧羊者」と子ども聖書日課がますます用いられ、子どもたちの日常生活の中に生かされ、祝福されますようにとお祈りいたします。

終わりに今号の執筆者を紹介いたします（敬称略）。

聖書講解	加藤郁生	金井望
研究資料	井上義美	木村勝志
メッセーシ例	松浦みち子	飯田勝彦
ワーク	鎌野幸	吉田美穂
		長谷川ひさ

子ども聖書日課 小野淳子
フラッシュカード 土屋直子 藤井洋美
また、校正の鎌野善三師、小岩裕一師、加藤 清師、
光田隆代師、打ち込みの藤井正子師、楠 淳子師、鎌野
幸師、カットの伊中めぐみ姉、陰で労された各師と兄
弟姉妹、発送とワーク印刷のベラカ出版、印刷のアク
トと菱三印刷に心から感謝します。
(長谷川和雄)

聖書教育教案誌 牧羊者
二〇〇九年度 Ⅰ巻
二〇〇九年四月一日発行
発行所 有限会社 ベラカ出版
金咽監修
日本イエス・キリスト教団教会学校局
神戸市兵庫区塚本通三―一九
電話(七七八)五七五―五五一
FAX(七七八)五七五―六六一
印刷所 菱三印刷株式会社
電話(七七八)五七六―三九六一
※日本聖書協会「口語訳聖書」使用許諾済み